# 淡路國名所圖繪

卷之二

東京圖書館
冊 一九號 架 一〇函 類 門

10
1
19

淡路國名所圖會卷之二目録

洲本府　洲本城　洲本明神社
南學院　龍寶院　蛭兒祠
住吉神社　金毘羅祠　宮崎
八王子社　江國寺　青蓮寺
千福寺　專称寺　淨光寺
淨泉寺　地藏堂　物部河
吸江寺　平田氏碑　名産皺竹　光明寺
古石佛　同不動　藤谷妙見堂　住吉神社
伊礒　内田社　由良浦
由良驛　由良古城趾　成山社
由良漢神社　八幡宮　成山古城
生石崎　佐比山　生石社
八幡宮　松崎掛牛　住吉社
神宮寺　淨福院　成山社　御石権現社
淨福院　地藏寺　櫻埼　生石社
本妙寺　觀音寺
藥師堂
安覚寺
隱江

從二位侯爵蜂須賀茂韶君題字
故從二位慈光寺實仲卿序文
故曉晴翁鐘成著
故松川半山翁画
故浦川公左畫圖

# 淡路國名所圖會卷之二目録


洲本府　洲本城　八幡宮　洲本明神社
南學院　龍寶院　神宮寺　蛭兒祠
住吉神社　金毘羅祠　淨福院　宮崎
八王子社　江國寺　地藏寺 櫻墳　青蓮寺
千福寺　專称寺　本妙寺　淨光寺
淨泉寺　地藏堂　藥師堂　物部河
吸江寺 平田氏碑　名産皺竹　安覚寺　光明寺
古石佛　同不動　藤谷妙見堂　隱江　住吉神社
伊礒　内田社　松崎　掛牛　由良浦
由良驛　由良古城趾　成山古城　成山社
由良渓神社　八幡宮　住吉社　生石社
生石崎　佐比山　御石椎現社　觀音寺

孝子久左衛門
筑紫神社
猪鼻古城
阿彌陀堂
城之臺
安楽寺薬師
賀茂神社 下
栢森住吉社
鶴岡八幡宮
石田三成墓
蛇目石
千光寺 本堂 護摩堂 宝塔 香爐堂 金毘羅社 聖徳太子祠 出現松古木 經藏 三神宮 太神宮 岩窟 狩人忠太墓 龍王祠 鐘堂 鐵塔 草秀俳諧墳
草秀の略傳
上灘
八幡宮
物部郷遺趾
御前森
笠松
素間地藏
彦山古城
御田植の神事
精霊會火踊
小原薬師堂
七曲
泥亀石
先山
狸岩
柏原山
満泉寺
伊勢神社
亀谷薬師
白髪神社
賀茂郷遺趾
賀茂神社 上
安宅邸趾
牛王水
岸河神社
三上嶽
松亀寺
瀧水寺
蛸薬師
物部池
鵜原溪
寶蓮寺
鴨河
内膳之遺趾
釋迦堂
阿加井寺



阿加井
白山祠
準眡堂廃趾
岸河
堀氏邸趾
石田側室墓
新宮祠
鑄匠松岡古趾
阿彌陀堂
廣田郷遺趾
廣田八幡宮
大宮寺
釜ケ淵
古城蹟
中條川
蛭兒社
不動菴
古城蹟
鰮谷川
鰮谷瀧
五瀬古墳
養宜郷遺趾
八幡祠
榛谷古城
五瀬社 以久祠
戒壇森
正遍寺
比丘尼岩
岸河神社
羽風山古城
東北山觀音堂
觀音寺
勝間古城
山添古城両趾
宮村河
廣田池 宮村池
祇園山
廣田清水
中田觀音堂
愈の木林
鶴の宿
初霜岡
八王子祠
藥師堂
満石山不動堂
大泉寺
養宜河
中山 中山橋
養宜舘古址
同藥師堂
入田河
古城墟

矣原神社　犬馬塲　成相寺鳥居　古城趾
安國寺廃趾　成相溪　蛇磨石　金石橋
成相寺　本堂　大日堂　阿字石　鎮守社　摂社　若宮八幡宮　奥院古趾　鐘楼　中門　大門
屏風岩　石盤　上田八幡宮　覺住寺
上田古城　犬馬塲　以久祠　古城址
鑓石　國分尼寺古址　國分寺　本堂　七重塔古址　羅漢堂　鐘堂
金剛寺　善光寺　八幡祠　野口屋敷趾
小井観音堂　圓行寺廃址　唐門臺森
白鬚神社　賀集盛政碑

洲本府　南ハ乙限高限曲山ヨ鎖キ東ハ海濱ヨリ西北ハ物部川ト環ラレ其流海ヨ入ル中間壕門臺の東ヲ内町トシ西ヲ外町トシ十八町の坊名アリ寛永中由良の故府ヲ移シ稅ヲ取ラシム以来土民富庶ヲ俗ヨ由良引ケシ云ハ則此由良の浦の人家ヲ洲本ヨ移シ寛永八年ヨ始リ同十年ヨ終ルトゾ市中頗ル繁昌ス

一説ヨ昔海濱ハ大ヲル洲ナリ仍テ洲本ト号ク後ハ須本又國民早書ハ次本ト書ス今ハ洲ヲ一安澄云洲又クニヽ訓ゼ當國ハ國の初ヲル洲の本の義吳都賦注ヨ曰水中ハ居ベキヽ洲トイフハ小洲ヲ渚ト云又釋名云洲ハ聚也人及鳥聚ル息フ所ト云云

陰德太平記土佐軍記服坂氏系譜須本ニ作ル南海治乱記當所明神の額文名洲本ニ作ル三好軍記諏本ニ作ル

友直云諏亦須也國史云聖武天皇天平中須波國ヲ廢シテ郡名トヲル其後何の世ヲヤ字ヲ改メテ諏訪ヲル當所諏訪明神鎮座故ハ諏の字ヲ執用ヒ諏本トヲル又須ヨ作ル旧一躰也本朝行程記ハ巢本ヨ作ル舟行日記ハ肥後國天草郡辛田の沖一里餘ニ洲本島ヲリ又若狹小濱ヨリ二里西丹波境ハ須本ヲリ日本行程細見記ヨ見ヘタリ此餘本朝ヨ同名多シ

洲本城 洲本高隈山より城郭と築き俗に城山と云ふ山上に古松翠と積み城樓の臺榭石壁多し山下に壕石壁あり太守の殿舍あり国老の第宅は左に立列り當城と守護あり内外の町の間に壕の内に門臺の石壁櫓臺まあり諸士方の宅地坊内に多く布政所とゝび吏勢の官邸少あり

安澄秘録云大永六年安宅隱岐守治興こゝに此山に城を築き居る太永六皇百五代後桓原天皇の年号にて足利十一代義澄將軍の治世なり嫡男安宅河内守冬一相續て居城る天正九年十月羽柴筑前守秀吉織田信長の命に依て淡州と退治る安宅の一門皆信長に降参て廓城を同十年二月仙石權兵衛秀久と以て居る云云

天正十三年乙酉より慶長五年迄は服坂安治居住る此時城墨と再修る元和元年當國守に御加賜有て後寛永八年卿経営なり由良の府と洲本に移て同十二年御経営成就て人家既に移り繁花の地となると云常盤草味地草に見る

南海治乱記曰天正十三年乙酉秀吉公四國征伐の時三好中納言秀次は丹波の兵と卒て播磨の國に出て淡路の岩屋に渡て大和和泉の兵卒は淡路の洲本に著陣て一所となる云云

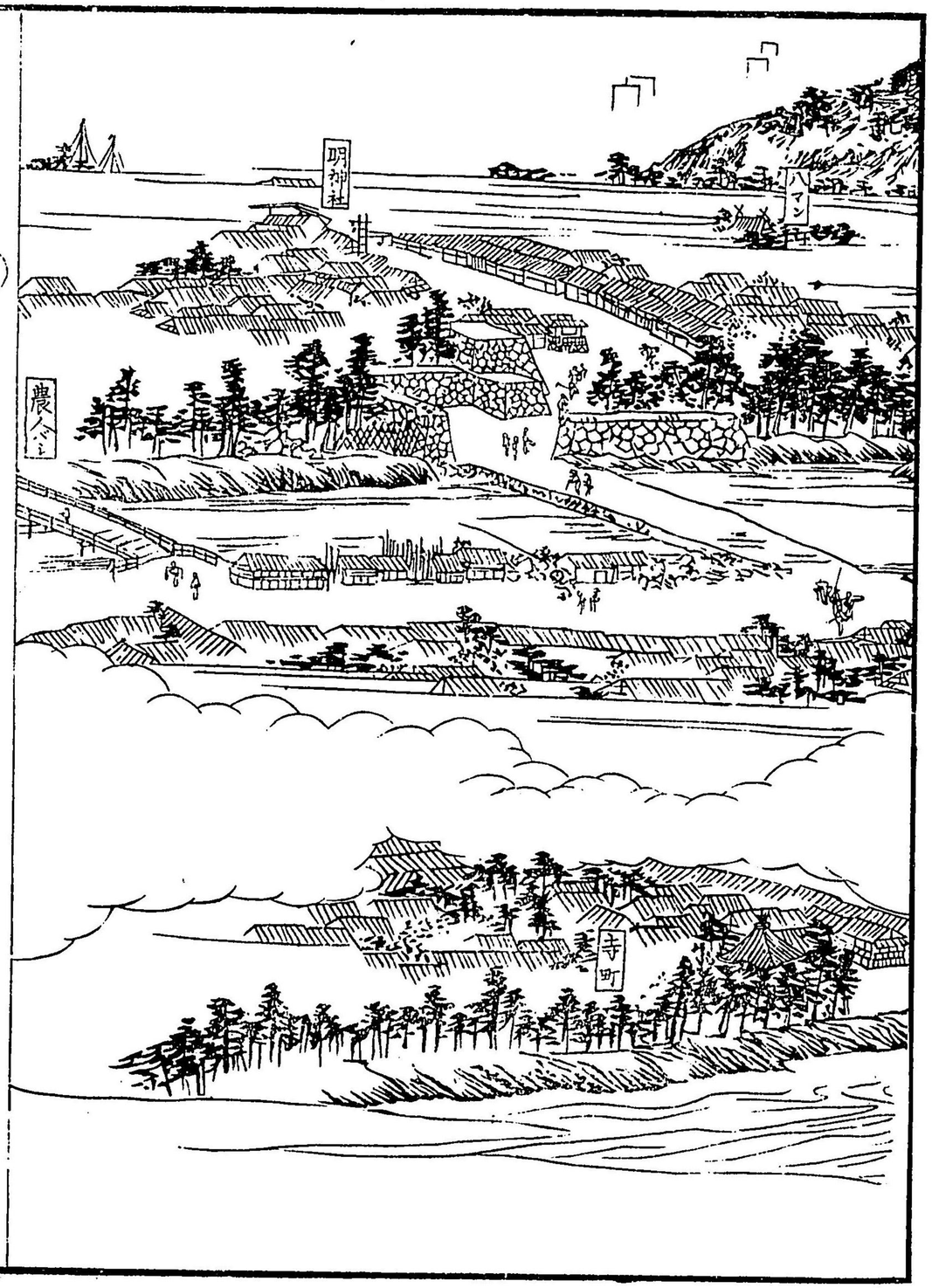


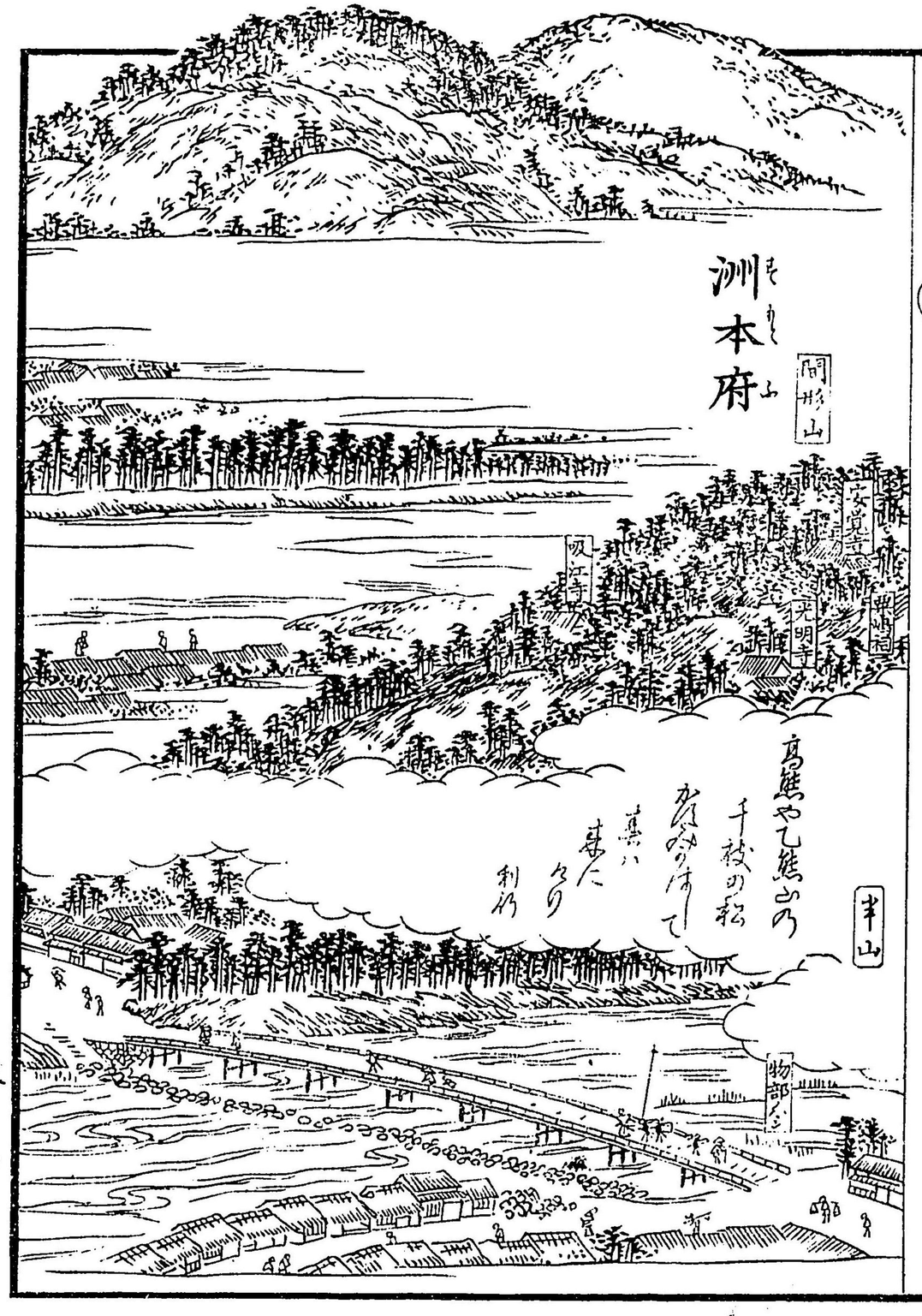
八幡宮 洲本御城辺にあり洲本上下物部村津田村の生土神と例祭正月廿七日御輿渡御六月晦日夏越祓八月十五日駈馬神事

當社縁起起云

千早振神の御事なるかな天地の中にいまの世の人に神の恵み給へざりしかはあれど神を信ずる信義なき時を跡を踏みまとはとゝも感ぜ我玉垣のうち地球国その神の古代と残るなり人々利ぬれど又ふあるべきやんごとなきと他人又今の世の人耳に聞れぬ所にて拝るるあるなるべしもあるべき當社のるむ一條院の法宇永祚二年の藤原成家卿と仰いひし人此別の刺史なるべし給ひぬ私と糟ひ鑪と接へ海面陸のごく於しうるべもなく絶ど絶あれ都と出なるべ治の渡路浮いつくこん故郷の空も雲井とあがめやりやゞ見なん洲よいなんとは沙四月廿五日の事あるべ治酒なりて私も皷あるべきるべ人れ人々あるべたるべ今ぞ限りぶ神と佛あるべ軽むるあるいるは自安観世音と

とあ沙声いやあは祈あき兼家卿は武國に立むひて曰王事霊じるあ


明神社
八マン
農人
寺町


洲本府
問形山
安覚寺
吸江寺
光明寺
明神社
高熊やゝ熊山の
千枝の松
春の日てり
其ハ
物部人
半山

やつがれ不佞ながらも勅をうけて世間をむすぶ（間道）仲介諸国を仲介冊
る二ばしらの古神宮初めて
いまゝさ神やいなそでんまれ国よりなば齋さはふやうんと来ふく
蒙の会堂をさゝげまゝ再拝しまつりの神ひつまの盤をおしむさ
国津神ゑるゝのまに登りましまゝ宮のきん罷り罷りて
ゆきを清をなのごとしいのれを祭るなるむひあるゝ山のたに白くそひる葛
あり風ひるがるるかとあるふ白旗まそたりをふをひめけるさ人のみて拝よ
玉ゑをそ椒をそ州の神の守りをふ風を風雅まく
程なく国まつさ人ゑるのふきゑ令たまりぬさく白雲の山そ峯のゝそ物ふりた
なつ二松のれたちされるふの相なり苦澤むて糸色たるゝ絡どゝ榊臣とゆ足原
あれるの人又同じ世系を文なるまりまく言家とまむて慶幸天皇氏ゑる
志だゝく古軍をとめん物ゝゆまりをゆ作りゆふと言伝めれど宮ら
ゆゝとひ伝る射ひるの義生くゝれ八幡大菩薩ふゝそいとゆふく



うゆ汲ね社あそ八幡の古神あれくいくゝ賽ゝゆどくて宮作りそたりあくる
本社亟頂ゝくくゝ拝殿舞殿長廊楼門そ多人示そ絵の伴社そくゝあゝし
き材を用ひゆりゝ多れるたりふ造りゆせり社前ふ池とりりく放生のゆを多ゝり
拔朔ゆ多ゆ清浄の人ともて楽門と置寺一宇を立垂童寿佛の像を
ゆ人常楽寺と名け松のゆゆあれど松林山と號て神前三的の供観急ゝび神
る祭ゝれば又寺二字と名ゝきて作ふやりる人とゝ物外の邑数百軒の
因と寄ゝ供燈よ撥ゝ国家安寧万民の安饒といぬゝゝむ
夫きのふとゝれ者ふとゝいひあるゝ川の関係ゝりゝ捨ゝ世ゝゝ
人あゝとあゝぶゆれゝ榊事言ゆゆば雑る昔と問ゆゝやたゝ筆のゆと
のゝそ世ふ清ゝるゝるゆたゝあれべつゝゆゝこゝの系れ恥べゝゝゆゝ御
筆と深侍りぬ

弟保元甲寅年三月吉日

隆實

續録

當社は成家卿の齋き祠ゝ幸ふ右の記ゝ宝ゝ亡び昔より正月廿五日ふ祭礼あり先廿三日ふ神あゝ大般若経を社僧ふ勅讀を是を細解と
いひ又此所ふ生る男子の祀やゝ三歳ゝ成る者の後ゝ祭ふ礼中の騎馬を
多甘ゝ是と軸頭といふ中世栄四人か六人ゝとゝあゝ又三歳五歳の子ども
男女ゝふ花籠を持神楽の供奉を為是を花の頭といふ氏子の月日ゝ
神の霊験をあらはゝ動ふ日あれゝとゝ成家ゝ祭ふ稀ゝ儀式より後ゝ
皆ゝ村の老風をまゝり来れゝ

寛元二甲辰年正月日覚本記　○文亀二年の跋辞天和四年の奥書ふゝ畧之

古記曰成家卿建立ゝ所は今の宮崎の岸あり後世物部氏の人園の上ゝ移は是
今の村神の地也又俗説ふ曰村神の神像洪水の為ふ漂流ゝ宮崎の地ゝ止ゝ
津田村の人拾ひゝ今の地ゝ祭ふと云

洲本明神社　洲本市中ゝあり所祭諏訪明神ゝ往古海濱洲の上ゝ土を堆ゝ其上ゝ小祠を設け
て営立ゝ修験南学院ゝ社事を司らゝむ仁井田立社明神とも云　鐘楼門の傍ゝあり
金毘羅祠　役小角堂　其余末社ゝ祭神多ゝ畧之

南學院　同所ゝあり洲本明神の別當職ゝ寛永五年寺町ゝうゝれ移ゝと云

龍寶院　八幡宮の傍ゝあり松林山と号は旧名常楽寺本尊阿弥陀佛立像定朝作ゝ云二重宝塔　辨財天社
地藏堂ゝあり　真言宗

神宮寺　同所ゝあり大悲山慈眼院と云本尊正親音　春佛師作云往古は當寺も八幡の社務を司どりゝ
真言宗

蛭兒祠　内町の浜漁家町ゝあり西宮太神宮と勧請は寛政三癸年六月此社再建の功成ゝ廿六日
迂座の規式執行の礼翌廿七日は正祭日あり此日黎明川口水尾搦のゝうゝ目則ぎる奥の遺滓ゝ
漁者太良吉太郎助ふ鉄衡ゝ以ゝ貫き得ゝ取敢は此神前ゝ供ふ名と九万疋と云長ケ五尺許此魚
他所ゝ多ゝあれど未ぎ此海ふ見へ来らぎ漁叟が曰此魚ゝ小ある時は其名と止於百とゝ又肥肉ゝふ
鱗ゝひ漸ゝ二尺以上ゝ到れば九万疋とゝ斯の如く成長ゝる毎ゝ草名ゝれぎゝ別称と出世魚と称ゝる
年ゝぞ時日も多ゝふ迂宮の祀日ふゝ出世魚の近く江口ゝ来ゝるは追日大漁ゝんの吉瑞を示ゝ
ゝゝや恰も雲別杵築の竜蛇又は総別香取の鯉魚の如く海神ゝ此神ゝ供奉ゝるものゝと諸人渇仰
誠心の思ひゝ堪ゝ難ぎゝ

住吉神社　金毘羅祠　右同所ゝあり共ゝ淨福院守護は

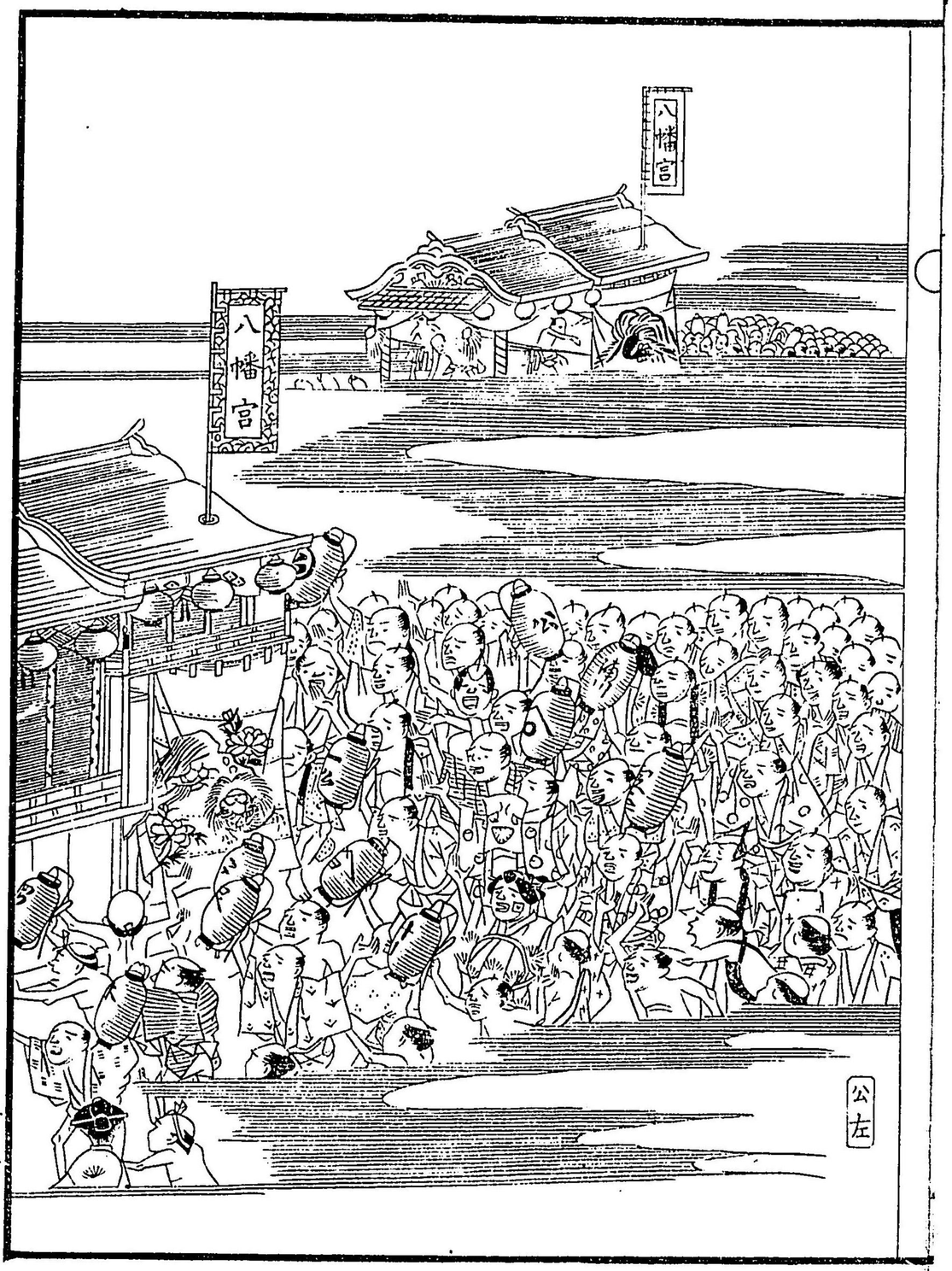
淨福院　内町舟倉とゝ所ゝあり修験職とゝ為ゝ院内ふ役行者堂　不動明王　弘法大師ふと安は
毎年六月六日會式ゝあり

宮寄　當所東の出崎とゝ八幡宮縁起ゝ云古跡あり

八王子社　卯城山の中央ゝあり大永六年の頃安宅隠岐守治與始ゝ城と築く時祇園五男三女と多ゝ
城廓の鎮守とゝ登ゝ四町ゝあり　外町ゝあり禅宗ゝ往昔由良の浦ゝありて海福寺と号せゝと此ゝ移ゝ今の名ふ改むと云
開山は大秀和尚と聞ゝ国老代々の声菩提所ゝあり

龍捜山江國寺　旧地は由良四丁目ゝあり地藏堂と云寛永八年洲本ゝ移ゝ本尊地藏
寺町ゝあり光珠山理正院と号は
そゝは傳て云弘法大師の作ゝて由良成山ゝ在ゝ池田家の守本尊ゝあゝ夢ゝ蒙ゝふゝ當ゝふ

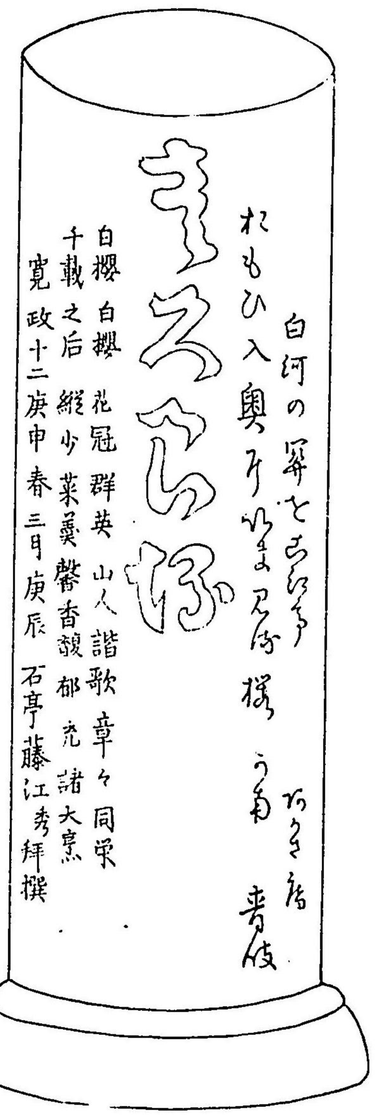
地藏寺



叡本八幡宮の祭礼八例年
正月廿五日にて氏地十八町の
町々より地車を出し或八
俄狂言歌舞伎芸をつく
思ひ〳〵に練延向
とりて率雖し神慮と
いとゝ嬉しくも其徳
国中無限の神事
なり

安楽院愛宕 春日 稲荷 相殿の小祠木食堂へ弘法大師と安楽院山門へ金剛神と左右に安楽院又境内小横塚あり青岐これと常に石亭の筆兵三文賢あり高サ一間ばかり圓形

櫻墳碑略圖




碑文略之

右藜菴青岐ハ當洲本の人にて小山氏と云 俳諧に達し門人多し 文化初年没ス

青蓮寺 寺町にあり宝池山清淨王院と号 旧地ハ先山の中にあり後本由良浦に移り安楽坊と号し寛永八年洲本に移る 本尊観世音ハ先山の観世音と同木とも作るとも云 境内四社明神あり名野丹生と多るト云

千福寺 寺町にあり玉光山愛染院と号 旧地由良四丁目にあり本尊愛染明王 境内に愛宕社あり 真言宗 寛永中に今に移る

専稱寺 寺町にあり心念山と号ス 浄土宗 旧地ハ由良四丁目にあり寛永八年洲本馬場町に移り延宝元年今の地に移る 本尊阿弥陀佛座像長四尺 往古三原郡西山の幽谷より出現もとより

稱名寺 同所にあり護念山と号ス旧地由良浦四丁目寛永八年に今に移る 本尊阿弥陀の作にて坐像と納む境内に観音堂鎮守の社あり旧名藤の宮と云

本妙寺 寺町にあり旧無山と号 近年神力山正慶院と称ス日蓮宗諸寺と同じくこれに移る 三十番神 鬼子母神 大黒天の堂あり

淨光寺 寺町にあり梅林山と号ス一向宗諸寺と共に境内に菅神の小祠あり



淨泉寺 七町目にあり楠林山と号ス一向宗寛永十年由良にうつる 後に楠の樹下に當御前の小祠あり 寺町にあり子安地蔵と安ス 座像ふる小野堂の作と云

藥師堂 寺町にあり座像長二尺余當国藥師巡拝第廿三番の霊場なり 岡山安覚寺と上の藥師と云 こと下の藥師と云

地藏堂

物部河 外町の端にあり川の向こう下物部村と云 奥に出て上下の物部を経て来向川と合流して海に入

此河にて布を晒せり又溪鰮迅速魚多し有り遊漁を楽む人多し

吸江寺 城山の西南同形山の下にあり 碧巖山と号ス禅宗なり 僧坊林泉もよろし佳景 旧地ハ山路にあり 祇園社寺中の山の半腰にあり例祭六月十三日十四日 系詰群集ス

當寺中の背の丘小平田治部右衛門某の碑あり一説ハ平田某ハ大坂方の士なり 子孫稲田家ハ飯降臣にて仕へ連綿として金屋村に住ス と云

名産皺竹 御城内に生ずと云花器に作りて佳し 安永年間日野大納言資枝卿花生に常磐の友の名を銘し詠じ給ふ和歌三首 前書略之

幾世々の春秋ちぬ友と見ん常磐に竹の影きよらぬ

岡山安覚寺 津田村岡山にあり 真言宗 俳士武者の墓あり 本尊藥師如来 行基作 二王門金剛神の像ハ運慶作と云

寺記に云當寺ハ一條院永祚年中藤原兼家の族藤原成家淡路國司代として時此寺を創立あり 尓後實弘上人再興ありと

按に道範上人の紀行に淡路に配流の人 實弘上人と 炬口にとどまるとあり此時

實弘當寺ハ入られしあるべし

光明寺　安覚寺の西にあり旧名蓮花院ト云本尊阿弥陀佛と安に真言宗寺内に淡島社あり

光明寺と号する寺院當国三ケ寺あり畠山ト山淡路国光明寺ハ卒にとゝゝ何れ劣ゝと按ず常磐草ハ志知川村なる光明寺のよし見へたり

五智石佛　同所の山下にあり大石ハ五智如来の像と彫刻せり至つくの古物あり里老の云此地ハ吸江寺の旧地なりと今尚礎石存ずるぞ

古石不動尊　同村丸山の石崖ハ彫つけたり弘法大師の作と言へり

曲田石窟　俗ハ小六が穴ともゝ間形山にあり真偽詳なれど右の五智ハ同じ

藤谷妙見堂　同村間形にあり北辰星を鎮祭ず常三詣人多し上古穴居の跡あるんかト云

隱江　鷹江ともゝ云津田村の支落小路谷ハあり洲本城山の南の海渡ゝ風景ともゝよし此地ハ瓦工あり屋瓦陶水槽ハ多く出ず

住吉神社　右同所にあり本社ハ海上に對し社頭の光景四方の眺望美観あり　伊礒　津田の海辺にあり

内田社　内田村にあり鳥居の傍に句碑あり　掛牛　内田の海渡　松崎　内田由良の境の海渡ゝ

由良の浦　洲本の城下より凡二里ばかり東南ハあり

當湊ハ紀伊國海部郡と去ること凡三里許長汀海ハ出て港中廣く諸列の海船まりくゝに泊る事ハ國君の里邸とゝぐめ漁家商家軒を並べ終日交易ハ隙

なくゝ至つゝ繁栄の浦里なりされば漁夫ハ漁ハ魚蝦ととりゝ廣邑ハ衒ぎ妻ハ磯ハ海髪ととりゝ載きあちゝ国中ハ賣ハ又板裙帯白梅苔ハと出ず山中ハハ駒鳥三光鳥あどあり洲嵜の砂松伴が嶋の緑螺賞とべし　伴が島ハ是より一里沖にあり紀伊国ハ隷ず

凡そ當海濱及び荊江の辺ハ海髪　海藻　多く生ずる故ハ漁家の男女られと採てひべ別て七月中元まハ盆海髪ゝ家々ハ必らず食用する故婦女ハ磯の浅瀬ハ入り摘とり男ハ舩ハ乘じて海中と探り採りゝ国中ハ専ら販ぐ製法石花菜ハ似ゝ

由良驛　延喜式に出ゝ當由良より物部郷と経ゝ大野の駅まゝ廣田郷より福良の駅ゝ

延喜式兵部省曰　淡路國驛馬　由良　五疋

釋日本紀曰　淡路紀伊両國之境　由理驛　又曰由良驛

由良古城址　由良の浦の北にあり古城山とゝ今田圃とあり天正の頃安宅甚五郎居城ぞとゝ

里人曰天正の頃安宅甚五郎居城ぞとゝ安宅氏数世の後摂津守冬康三好長慶の弟その家と續しゝ三好氏の一族となりゝ天正九年ハありゝ織田公ハ降服ずと

いゝ尤其間の事詳なれど尚當國中ハ古城跡とゝ所多し皆建武年中以来

## 古茂江浦
## 住吉神社

遊古茂江

熊山盤海曲潮汐到城郊
石鼎巨鯨背林禁老鵰巢
洋中雲日盪國外水天交
島嶼堪呼應漁舟在樹梢

筱弼

室町の代より海内分崩せしより村里の地士等墨壁を搆へ其侵掠を防ぎ諸郷を掠略せしあるべしといふ

成山古城趾　同浦の東北の海濵にあり慶長中池田侯築ゝ所ゝ元和元年府城を洲本に移されしと云　成山社　成山古城の嶺にあり城中の鎮守なるべしと

由良湊神社　同浦八幡宮の並び西の端にあり延喜式に出当国十三社の一なり

當社昔は二月四日に祈年祭ゝ國司以下祭ゝ會して國幣を奉ると

淡路神社記云由良湊神社は速秋津日子神速秋津比賣神也

延喜式には何の社は何の神と神名を記されし後世の神を定めしかとも古事記は伊特諸尊伊特冊尊水戸神を生む速秋津比賣神と名くとられば湊の神社あれば也有べし

八幡宮　由良神社の左中央の本殿に多る宇治皇子社左に列る此余西尾神の表若宮神の表など同じ浦にあり高良社荒神祠山神と左右に列る

例祭正月十五日　分十五日　六月廿日　神饌の神事あり別當心蓮寺守護は當寺本尊阿弥陀佛は惠心作と云不動堂本堂の右に並ぶ藥師堂本社の對ふにあり鐘樓隨身門ありあり鳥居傍に蛭子社あり

住吉社　同浦の濵辺にあり

生石社　同浦佐比山の下生石崎の海濵にあり日本紀曰出石の小刀と以て多る所と云

釋日本紀曰　出石刀子至淡路島立祠

淡路國例式曰正月元日國内諸神奉朔幣　毎月朔日准此　正六位上生石社



先師説曰生石可讀之伊豆志也云云然則淡州出石社雖不載式生石社

鎮座為是之條國例式炳焉也　常磐草　生石は即出石の略語なるべし即出石生石同訓なり

延喜式曰但馬國出石郡伊豆志坐神社八座御出石神社一座とあり

日本紀　垂仁天皇三年春三月新羅王子天日槍来歸焉將來物羽大玉一箇足高玉一箇鵜鹿々赤石玉一箇出石小刀一口出石桙一枝日鏡一面熊神籬一具并七物則藏于但馬國常爲神物也

又曰　初天の日槍艇に乗て播磨國に泊て宍粟邑にあり云云播磨國宍粟邑淡路嶋出浅の邑是二邑に汝が意に任べしと時に天日槍啓て曰臣が住む所を所の天恩を垂て臣が情に願ふ地を聽るべし臣親く諸國を歴視て則臣が心に合ると給へと云云但馬國に至て則ち住所と定む天日槍但馬出嶋人太耳女麻多烏と娶て但馬諸助を生む但馬日楯杵を生む日楯杵清彦を生む清彦田道間守を生む

按に播磨國に今宍粟村と有淡路の出浅は此出石なるべし左之の

音通ずる故に此地を出浅村といひしあべし

佐比山　生石崎の辺とも

安雄按云生石寄の辺を佐比山と思ふは是いひ〻出石の神劔を祭れる社あるべ韓鉏の劔ありしを佐比山とあづけしなるべし神代巻に蛇韓鋤の劔と云事ありし神武紀に劔を拔て海に入鋤持の神とあるといふ古の劔を鋤とも云るあり佐比は今の須岐あり劔の鋒の尖なるを鋤に似る故あり

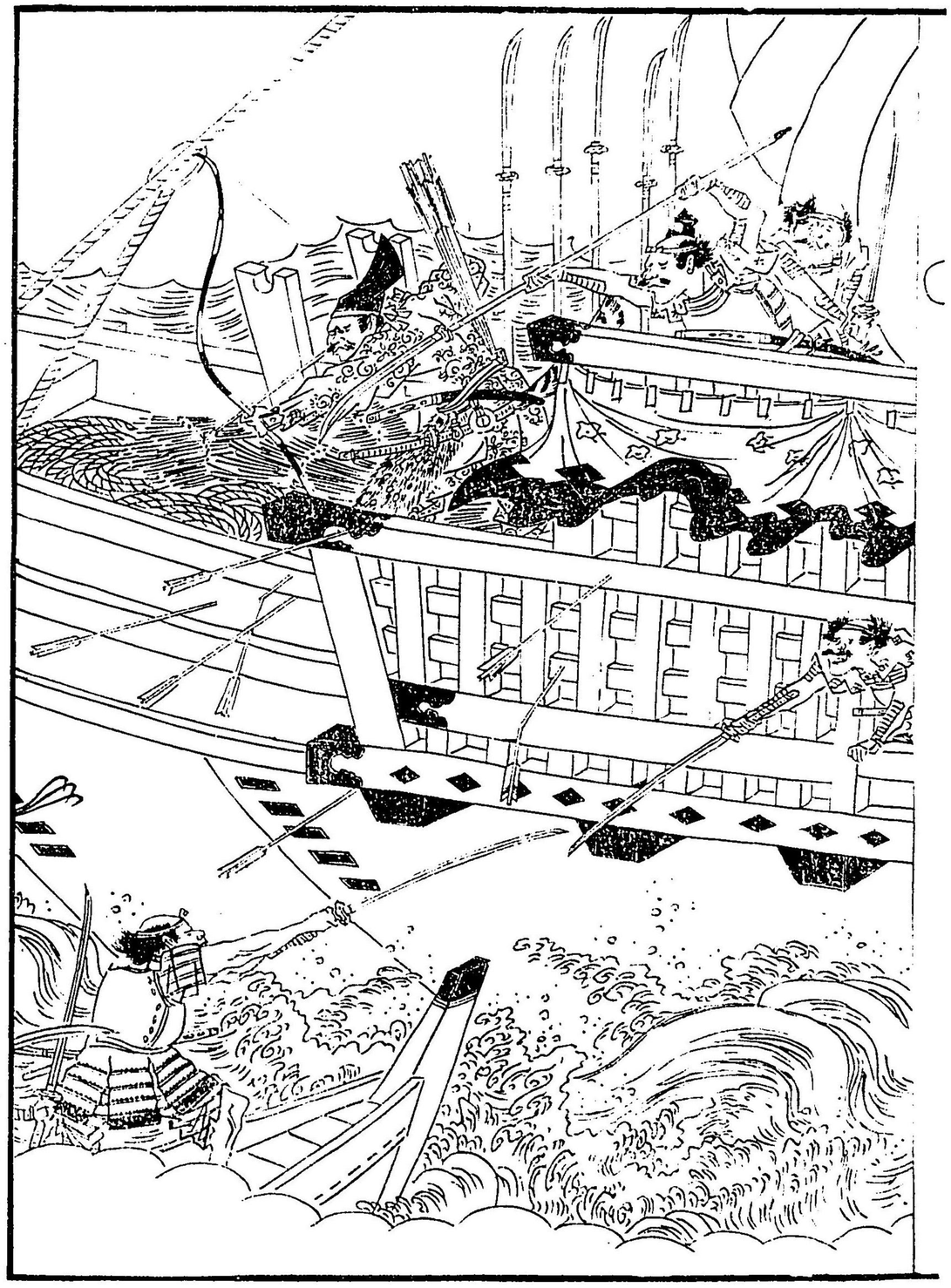
生石崎　佐比山の下海の岬をいふ海の畔に大石岩穴ありて暴風ある時は必らず此石岩穴ありて遠

御石雀現社　同所生石社の東にあり討死の武士を祝ひ祭る

三好記曰淡州由良の湊の西御石崎近年海上物騒しく潮の光なく夕陽の沉るが如く海底の鳴事百千の車を轟かすごとし漸もすれば往来の船に風波の悩と破損せるを其数を知ず浦の漁夫ども是を苦むと言ども其来由を尋ねるに先年阿波の屋形細川殿御代に弓箭に調させ給へとも大館主膳正有光といふ侍を和泉の堺へ遣せる処に有光申ひの侍に兵器を調へ急ぎ



舟に乗て順風に帆をあげ泉州谷川表を吹出る処に和泉の谷輪の海賊舟淡州の諏本の海賊船ども主膳が船と目がけ付来て却船へ物申さんといふ又紀州の田辺雑賀の海賊舟数十艘馳来て主膳が船に矢を射る事雨の降ごとし主膳これを見て悪き奴原が行跡ありて物見せて呉んとひく船屋形の内より例の剛弓を取て引て化矢もて射れば同じく船の内より究竟の射手ども数多矢を射出しる程に海賊船に手負死人のまゝ出来れば左右多く近づき得ば主膳も深手浅手負矢種つきられば舟の艫屋倉へ走り上て高声に言るは日頃あの海上を盗みて仕つけて共侍の最期の仕義見聞あるも有まじ是と見あるべく物語ませ我海底に入て欲心不道の奴原に障碍とあらん物とと匂つて腹十文字に掻切きつて死と唾へ浪の底に逆さまに落て失る残る侍ども腹を切船に火をかけ焼死ると云夫より今に至る此海の騒しき事止時なし死は又迎手三好実休より桑村隼人亮といふ侍と堺へ兵具調へに遣せし給ふ処にごんの御石崎表に海賊船数十艘付来て



大館有光
生石崎よ
海賊と
血戰ハ
半山

隼人亮も討死を是より猶驗〻成て往来の船ゞの風波の悩をたゞ事止時多〻故ゑ實休の仰として尊き僧数十人供粮して六万巻の陀羅尼を誦し亡び侍共と権現ゑ祝ひるひくよう今ゑ至るまで此海をづまり往来の船ゑ障をあきゝぞ聞え〻

## 觀音寺 同浦にあり本ゑ十一面觀世音 當国順礼の札所ゑ 真言宗

## 釋迦院 真言宗 淨土寺 淨土宗

ものゑ同浦にあり

## 孝子久左衛門

本朝孝子傳曰淡路國津名郡由良ゑ一孝子あり久左衛門と号を父を艱ひ深愛あり平生ゑ出て田ゑ在とゝ〻も父と念ふるひとバ来と釋て且て歸り父を見て而後ふゝび往て又役ゑ從ふの際も然り或ハ又外ゑ行て忽ち烈風雷雨ゑ遇ひ則ち執るの業を投て歸て以て父ゑ侍ふ其驚動を慰んゞ是の時ゑ方て人銭を倍して以て傭賃せんと欲ひとゝ〻も久く敢て出び父已が風雨ゑ傷けらるゝ事を憂ひん事を恐れてあり冬夜自ら寒さの祁ゑて覚る時ハ起て衣を求められを父が被ゑ加ふ父が曰



吾被薄うゝび宜て乃が兒を覆ふべしと久左衛門諾て而して退き敢て兒を覆ふび父が熟寐を待て再び往てられを加ふ父出て田畝を視んと欲るとハ則ち必らび躬ら負て而して行て其衰朽て出て視るの能ぎるふを至てハ則ち善禾若干穂を採て父を奉じて而して年ゑるとを知しむ若旱潦ゑ遇て其田熟せざるときハ禾の善ものを圖境を探て求めて帰て父ゑ諭て曰是歳凶ありとゝ〻も我稼とゝ幸ひゑ此の如しと父悦ぶるを甚し其心を用るの切なる皆此類ひあり郷人称讃せびとゝふ事なし縣宰稲田君これを聞て召てられゑ食せしめ且金を予へて曰人皆汝が孝と称ひ我願てハ詳ゑ其所為を聞ん乎久左衛門拜して而してられゑ答て曰人吾孝を称ひとゝ〻も吾ゑまだ嘗て孝なりとあり其辞氣謙恭の内實を自許して而して姑て是が為ゑ退託する者ゑ似び稲田君あび〻問久左衛門竟ゑ語あし稲田君更ゑられを問て曰汝父ゑ事るの道盡せり而ゑ心中ゑ尚歉然ゑとなりや久左衛門が曰吾母死せる時父いまだ猶

由良の
久左衛門
父よ孝養と
そ
半山

老ひ吾後母と得まゝ欲ふ志れども父允ゆゝ卒ふ鰥ゆゝ老ふ故と以ゝ抑
搔扶持今其入ふ之ゝ是乃吾常ふ憾る所あり又問ふ今日汝あゝに来ると父
れと知るゝや曰尋常ふ出る時ハ吾必らず明ふ其適所と告ぐ今日顧ゝ
ゝまと告ぐ曰何ぞ告ざるや曰吾と洌本ふ召ゝ事の臧否と知ぐ第恐らくハ
父ゝゝ驚懼ゝめん事と故ふ以ゝ告ぐと君嘗歎き云云

上灘 由良の浦の西中津川村相川村畑田村等の三ケ村と云畑田村ハ津名郡の郡界ゝ畑田の後の山の嶺と越ゝ黄田郷の鮎屋村ニ出る有り上下洋ゝ幽谷ゝて田畠少ゝ居民山ふ入薪と伐ゝ生業ゝれ山中ゝ猪鹿猴の類ひゝゝゝゝ中津川相川畑田川三流ゝふ皆其山中ゝ出ゝ海ふ入あり

柏原山 千草村の奥ニ有り国中第一の高山ゝ由良の浦ゝ上灘と眼下ゝ眺め山海の遠望最勝景昔ハ深樹良材多ゝと云今も尚杉の壇番匠が谷あゝ以ゝ不り是ふ杉檜と伐ゝ

ゝ趾の遺名あゝ且里人の農哥ゝ「由良の溪ゝ唐舟つゝゝゝ柏原山の鋸の音ゝゝゝゝ云
按ゝ唐舟つゝゝハ文禄中朝鮮渡海の舟と由良ニ於ゝ作りゝゝゝの有ゝあゝ

迦葉山瀧水寺 柏原山ニ有り俗ふ柏原の観音と云ふ當国三十三所順礼の札所あり

本尊 十一面観世音 弘法大師作

奥院 青龍權現 弘法大師祈水 山中ニ有り

筑狭神社 千草村ニ有り延喜式ニ出今諏訪明神ト云紅葉の森もゝゝ
例祭正月十日 本社の左右ニ末社列ゝ



八幡宮 同村ニ有り里人上社と云ふ筑狭社と下の社と云ふ
神前金口銘ニ曰

奉掛筑佐郡八幡宮寶前施入金口一面事

延慶二乙酉年平氏初若女敬白

満泉寺 同村ニ有り真言宗本尊阿弥陀佛恵心作 石不動明王 愛染明王ホの像有り 弘法大師作ト云

蛸薬師堂 筑狭社の後の山の方ニ有り大木の松有り俗ニ蛸の松と云ふ灵験有りゝとゝゝゝゝ

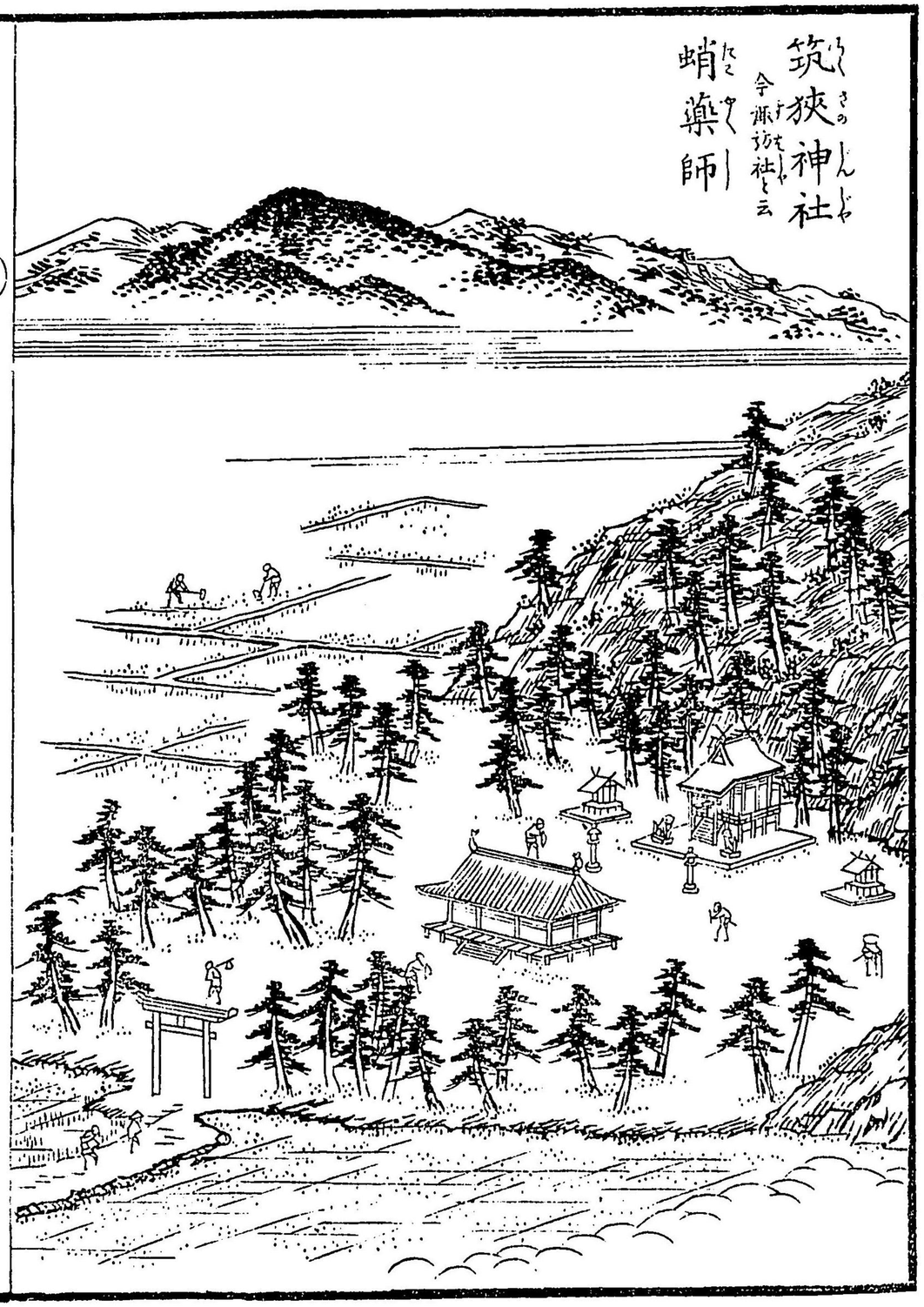
猪鼻古城趾 千草村の西南ニ有り大河内と云ふ傳云安宅志摩守居城ゝゝ按ニ由良の安宅の氏族多ゝし
同所の辺ゝ古井有り俗ニ井戸の谷と称ゝ又治助が谷入道が平あゝ
ゝ人所有り皆城主の一族の宅地趾あゝゝ石塔有り文字磨滅ゝ詳あゝ天正三年七月とのゝ存ゝ

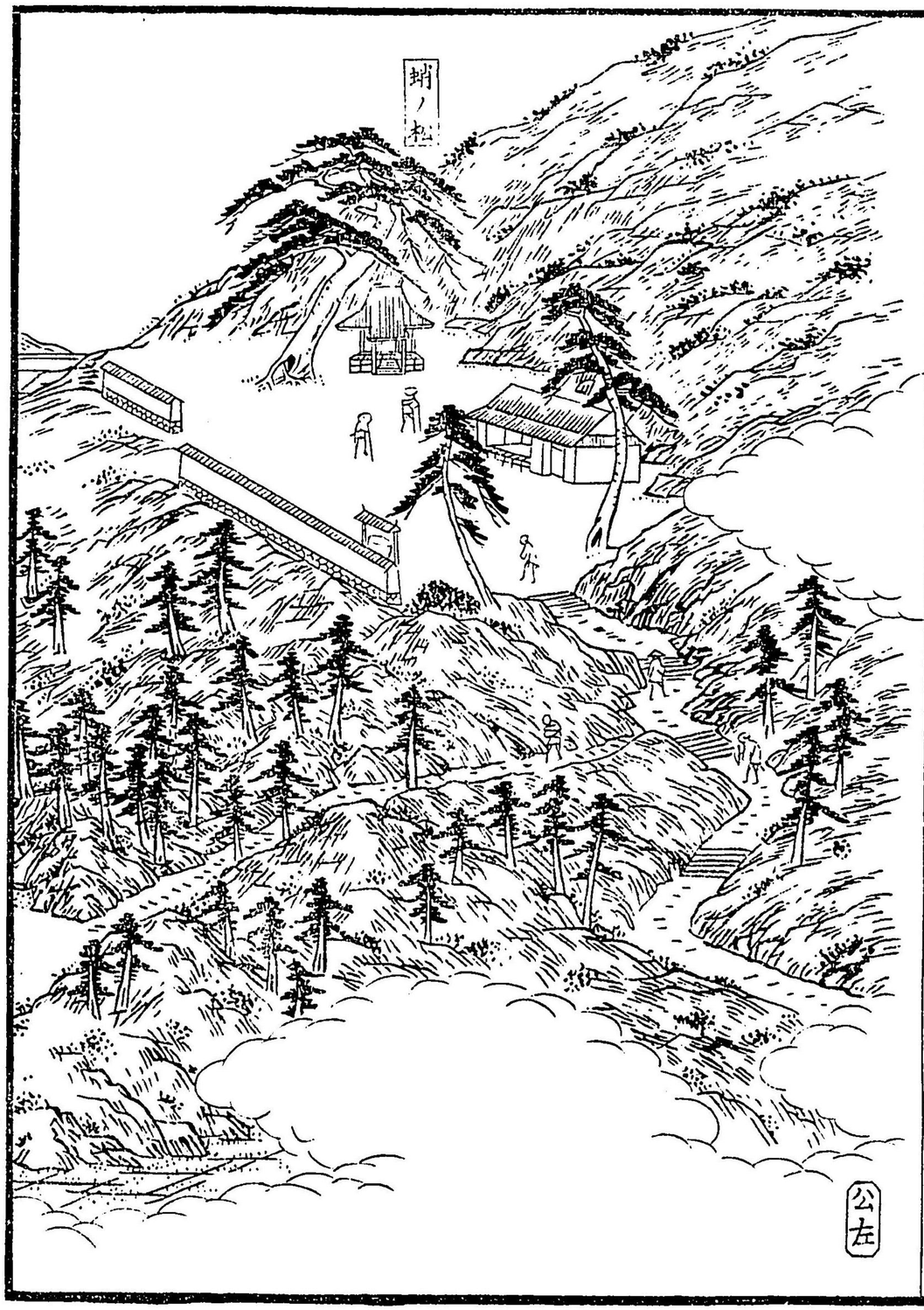
物部郷遺趾 今郷廃ゝて上下の物部村ふ郷名遺ゝ

和名類聚抄曰淡路國津名郡物部 毛乃倍

日本釋名云神武帝日向より東征の時物部の遠祖道臣命と以ゝ軍將ゝ給ふ
其故ふ武士を物部と云物部ハ姓ゝ按ふ往古此地ゝ物部の氏人領知ゝ所ゝあゝし

一説ふ上物部村の中ふ村上明神と稱ゝ小祠あり土人説ゝ州本八幡宮の旧地
あり仍ゝ今両物部も亦其生子あゝとゝり然ども是ハ上古物部の氏人此所ふ


筑狭神社
今諏訪社と云
蛸薬師


蛸ノ松
公左

居住して其鼻祖と祭るの旧蹟なるべし又西士兆殿司も物部の産みて其家大神氏なるべしは殿司の畧傳は見へざる物部の世系と誓るに物部へ世く神宮と齋るに職なり殿司へ物部の産みて大神氏なるべしも其據なるに似たりと云尚殿司の事跡へ別に出せざるに畧に

伊勢社 上物部村にあり 天照太神と奉るなり

物部池 同村にあり大池なり 俗に物部太郎とあり

阿彌陀堂 物部川の傍にあり下物部村へ 六月十四日詣人群集して賑ふ

多門天石像 同村にあり弘法大師の作なり 同所の川岸にも石佛多くあり

御前森 同村にあり森中に小祠あり御前明神と号に

亀谷薬師堂 同村にあり万年山と号に堂の傍に僧舎あり亀谷菴とあり 近来石階建立あり美観へ

里人傳云當薬師堂へ往昔山添城主加藤主殿助某の舘の玄関なりしと佛殿に用ひしなりとぞ 常磐草に天山とあり禅師の廃趾と再興なりしとあり其時此玄関を佛殿に作られしなるべし乎

鵜原溪 宇原村にあり大野村惣田の水西より入池の丹川南より入て合流し村の北山本と東北へ流れしを亀谷の池へ入 宇原村にあり亀谷の頂上へ来間下物部宇原の三郷なりて城跡僅に平地に存に城山とも云

城之臺 太平記の時宇原荘司入道永真あり暦應三年細川師氏鳴門を渡りて淡路を襲ひ今の八幡村の神境に陣を其時國中の冠首に宇原荘司入道永真殊に勇烈智謀の聞えあり国中の諸兵を従へ師氏と田中川に戦ひ日を経て勝劣なし時に師氏神宮に納め有とぞ其の鏑矢を申給り其翌日の合戦に終に永真と馬上より射落し一國を手に入りしとぞ 委しく中八木古城の條に此城最も高くして近境に平地あまた見えり此村に平次山とあり往昔某平次と云人居住せしとぞ又丹後山と云あり是も丹後と云人居住の地なるよし各此城山の西つゞきの裾なり又平地に六部一殿と云人居住の宅地廃して名のみ存せり姓名時代詳ならず 古城記

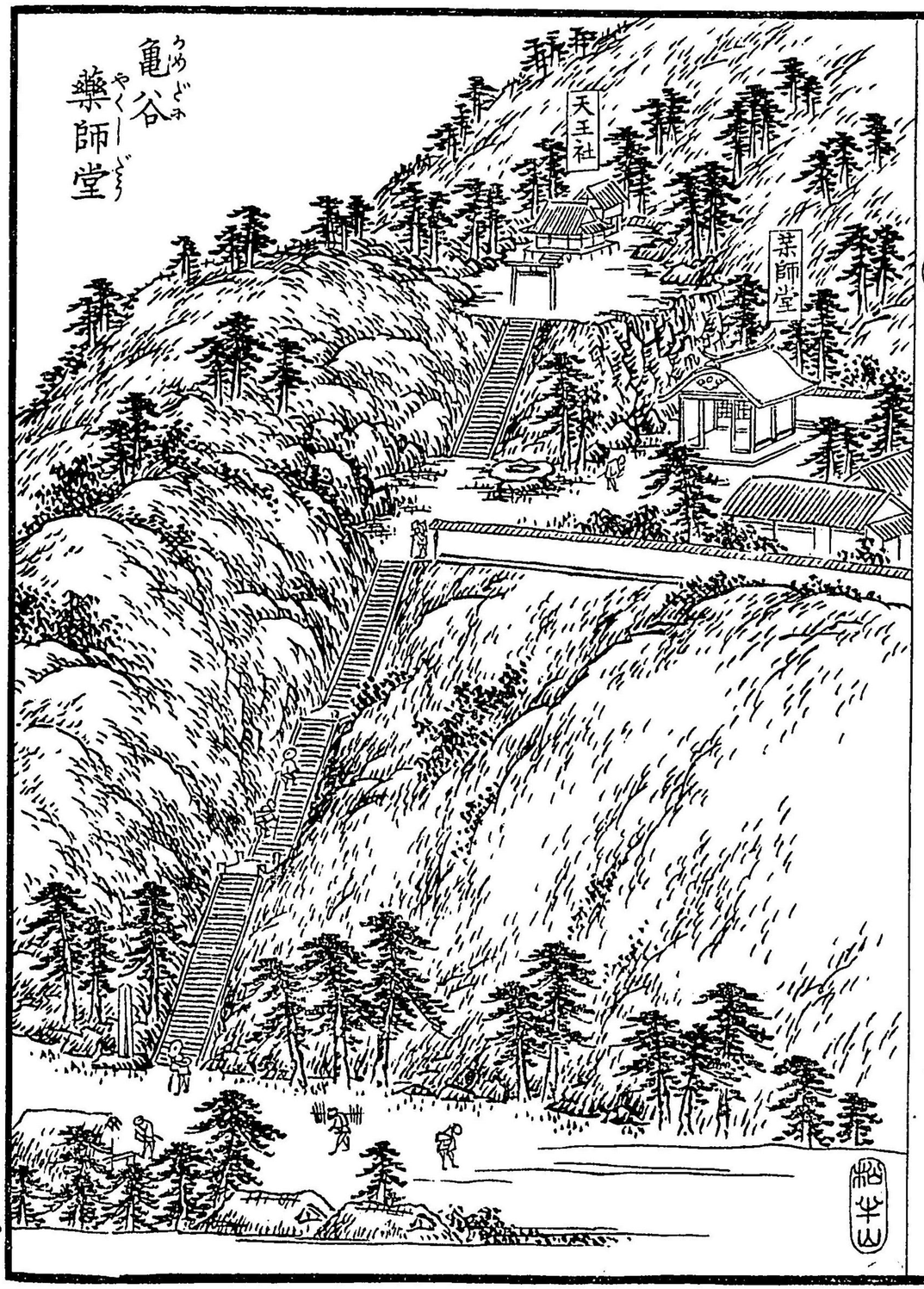
笠松 同村六部一殿居住の地なり故に六部一の村とも云惜べし 天保の初年枯失に

夕立に笠寄一本ならぬ宇原の里に笠松の陰 作者未詳

白髭神社 大野村にあり廣田の庄の惣鎮守と称に産地徳原中筋廣田納山添宇原木戸池内木戸前平鮎屋金屋池田大野等に一名大野明神と号に

本社 猿田彦太神 若宮 本社の左傍に 摂社三座 天照太神 愛宕 祇園等に 本社の右の傍にあり

神輿藏 門内の西傍にあり 鐘堂 本社の前左傍にあり 隨身門




寶蓮寺　右白髭社の東ハ隣ル平林山普門院と号ス本尊十一面観世音立像長一尺寺真言宗ニシテ則白髭社の別當ニ

薬師堂　安楽寺の旧趾と云白髭社の馬場ヲ西の東ニ田圃の中ハ小ク人安楽ちとりくろ院の古跡

大野驛古趾　大野村ニあり

延喜式曰浄路國驛馬大野五疋

往昔ハ福良より由良ハ廣田まで八當時よひとしく廣田より一とハ金屋大野と経て物部郷ニ出而しく由良の駅ハくると官道ニ成故ハ當所ハ駅と定られあり今ハ廣田中條より賀茂郷ニいたり物部郷ハ出る

味地草ニ云按ニ由良より福良ニ至るまれが小路谷千草物部宇原と経て妥ハ通じ夫より金屋中條八木の国府と順通せるゞ今宇原より金屋の官道八村の中央と東西せり是則ち古代の官道ハ云云

楽間川　楽間村ニ〆り水源鮎屋村より出て此地ニ〆り加茂川ニ入

蛇淵　楽間川の中ニ〆く山の裾ニ〆く底深ク淵ヲ成ス

里老云昔此淵ニ大蛇蟄しく寛延三年十一月十七日夜天上ヲ其時此淵鳴動

しかして九三十町四方余雹を降らす其雹の重さ七十六匁より八十三匁にいたる則金屋。大野。宇原。物部。内膳。賀茂。奥畑。納。山添。中節等十箇村へ降しとぞ

**地藏堂** 来間村山崎岩鼻にあり土俗称してこちたれ地蔵と云 霊験新にありて常に詣人絶ず

**賀茂郷遺趾** 今三原郡に上賀茂下賀茂村両村其遺名あり郷は廃してなしといへとも此地津名郡に隷すると見へ和名類聚抄延喜式ともに津名郡とあり

和名類聚抄曰 淡路國津名郡賀茂加毛

**鴨河** 来間川の下流下内膳村上加茂村下加茂村より宇山を経て塩屋川と合流して海に入

**賀茂神社** 下賀茂村にあり下賀茂来間半村の生土神とす社僧宝泉寺鳥居の東上の方にあり 薬王山と号す本尊薬師如来

**古城跡** 同村より三木田村に越る右の方の高き嶺にして彦山といふ此絶頂を城の墟とも云夫より東の方平地東西一町半許南北一町許一段ひくし此所を城跡と云城主姓名詳ならず

**賀茂神社** 上賀茂村にあり延喜式に出 上賀茂来間両村の生土神とす古は當社のみなりしを後世下賀茂村にも社を分祭すといふ

延喜式曰淡路國津名郡賀茂神社 むかしは津名郡に隷す今は三原郡也

常盤草曰 山城國賀茂舊記に欽明天皇御宇六十餘國に加茂の神田一所を置と云々此地右神田の由縁によりて勧請せし者ならん乎

**内膳遺趾** 上内膳村下内膳村といふありむかし内膳の人住し遺名ならんと云



日本紀曰 白髪武廣國押稚日本根子天皇清寧二年春二月天皇恨無子乃遣大伴室屋大連於諸國置白髪部舎人白髪部膳夫白髪部靫負冀垂遺跡令観於後云々

按に此地白髪部膳夫を置るゝ所にして内膳と称するならん乎内膳を加之波天と訓ぜ御膳を掌る人にてかしはて人ともいふ

**栢森住吉神社** 下内膳村にあり勧請の年歴詳ならず至て舊地のよし別當盛光寺 本堂大日如来栢森山或は西北山とも号す社頭の東傍にあり

祭神 三座 住吉大神 八幡大神 天満天神

鐘樓 随身門 本社の前にあり

當社田植の御神事といへるは三月十日にして其祭式いとも古雅なり其始め正月十八日に神事ありて今日植女を定む十五歳以下六人なり是よりしく當人精進潔斎をして厳重なり尓後三月十日にいたり六人の童女一様に櫻の模様の振袖を着し手覆脚絆の装束し紅藍の褑褌をかけ黒の塗笠を被り手に櫻楓の折枝を携ち凡一間を一反と定め神前に對ひて田を植る形容をなし神官太鼓を打て歌を謳ひて雑に其田植哥に曰

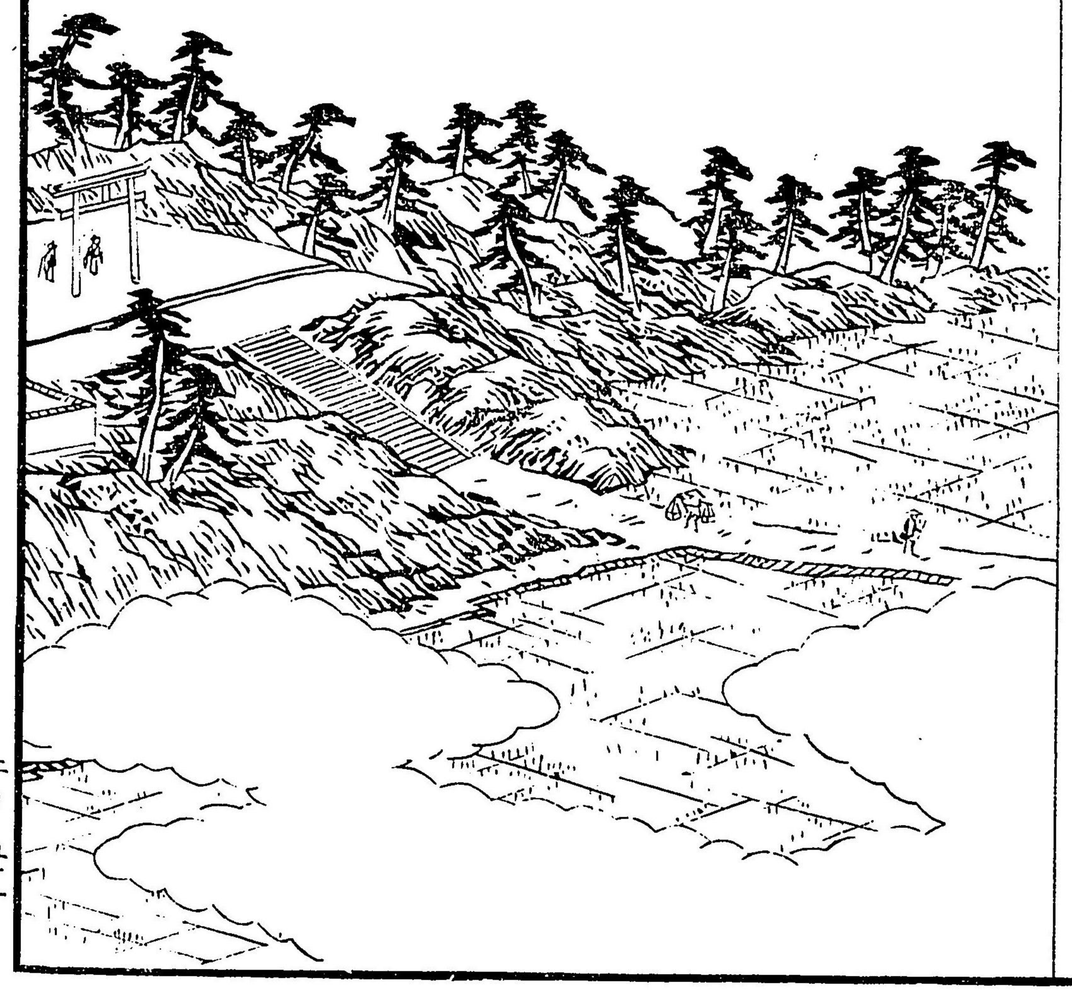
かものしゃ
賀茂神社

所社

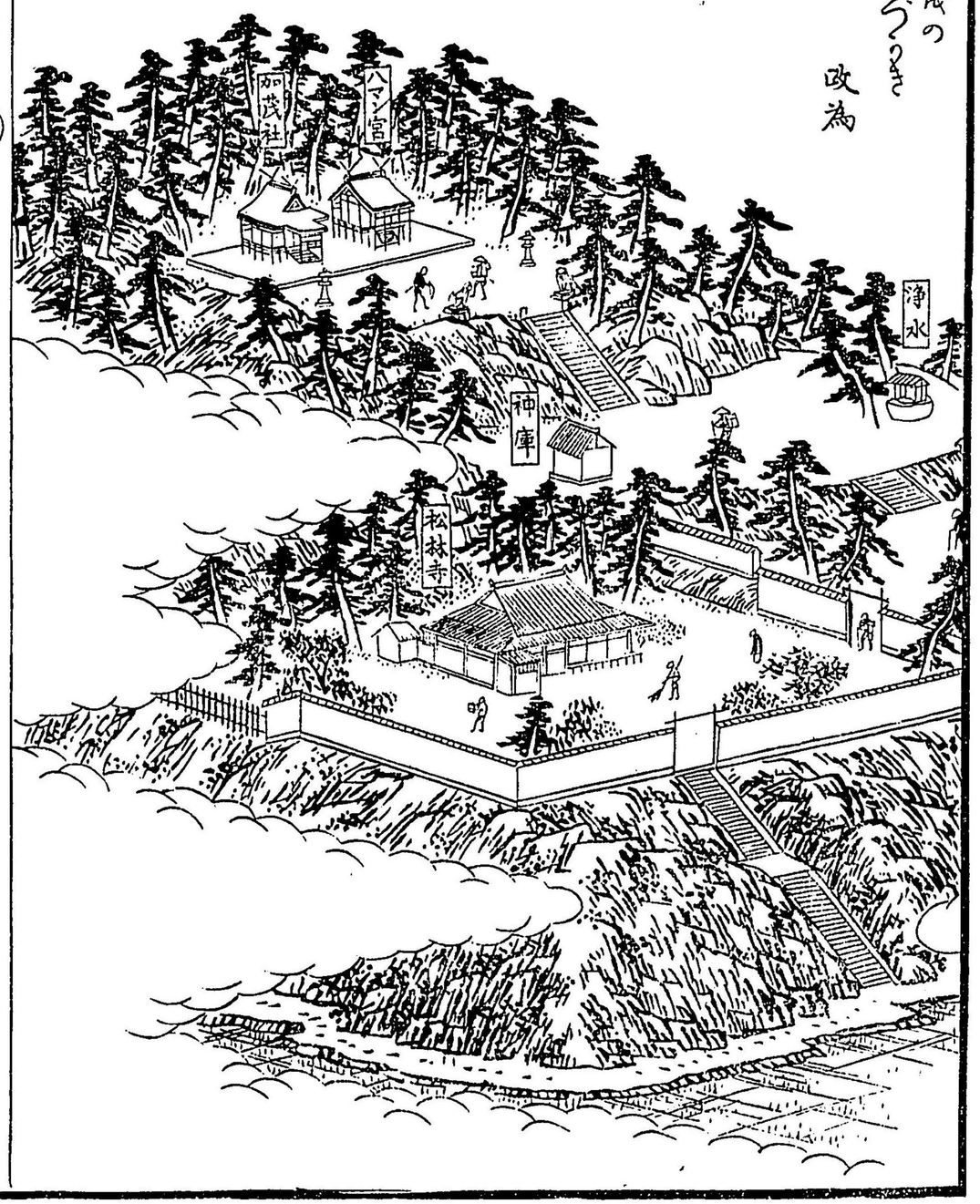
賀茂のめ和茂の
やしろのゝ
うきさ社
ゆふしき世ちり
見まほしはあり

斧中

世をこの
ゝゝをゝ
たゝみそゝ
ゆゝゝて
あらじ



賀茂の
ゝゝゝき
改為



櫻の花とせみ草の花とおのおの摘かげておゐ宮へ祭る

斯幾たびもくりかへし謳ひはやれ右例式をもて後花紅葉の枝を神前に供ふ其

神事始終の式頗る古雅なりといふ

精霊會火踊　下内膳村にあり俗に内膳の火踊といふ七月十六日の夕の踊の場所を火踊場といふ

此火踊といふハ例年七月十六日の夕内膳一村凡百廿有餘家おのおの其先祖代々の亡者の数ほど炬火を作り 長サ一尺寺斗 まはり三寸余 是を携へて三昧にいたり墓所の後の山の半腹に登りて平地の所にいたりて踊りを初むいづれも左の手に炬火を携へ右の手に笹の枝を持これを振まはして輪のごとくに列なりて太鼓鉦音頭の拍子にひとしく踊るも面白し又新精霊ある者ハ下なる墓所に於て踊りて山の上に来る事なし墓所ハ家々より燈籠をかけならべ殊に新精霊ある家よりハ奇麗なる切子燈籠など掛ならべ萬燈四面を照せり扨又数踊りて後山の上より踊の拍子にあはせて下なる墓の踊りの中へ炬火を投つるに大勢乱れ交りて恰も矢石を飛すが如し然れども聊もけがする事なく下なる者ハこれを拂ひ又落る炬火を取



て空に投かけ踊る事暇し世に無双一奇の是を内膳の火踊或ハ三昧踊と号けし遠近の村々より見物に至る者多し又ハ高き山にのぼりて遠方より眺望する者多しとぞ其踊の音頭に曰

　踊をやれおまよおんよやれおまよおくらのさんと成おまよ

一年雨氣にて踊を止しが山大に鳴て怪しかりし程に晴間を待て踊りしが忽ち静りしとぞ

安宅古邸　同村にあり方三十間ばかりの地の傳云三野畑の城主安宅九郎右衛門冬秀後に此所に居住せしものと云

釋迦堂　同村先山に登る坂口にあり庵室を正源菴と云先山の諸人往來の時此に休息ス　本尊ハ釈迦佛銅像長二尺五寸許傍に石地蔵の小堂あり

回國修行者供養石あり高サ凡四尺五寸幅一尺二寸許碑名　六十六部江州一幻　宝永六年丙戌十月吉日 有

上内膳村の中央にあり則ち岩屋街道の傍の鶴が岡といふ

八幡宮

本殿　應神天皇　末社　住吉社　荒神祠　傍にあり 本社の左　菅神祠　傍にあり 本社の右

八幡宮石階の下にあり社僧之西北山遍明院と云本尊ハ十一面觀世音座像長一尺六寸許

蓮光寺　古製の半鐘あり

牛王水　同村風呂の谷地蔵堂より一町許山口の巌石の間より涌出る冷水なりしかバ昔先山牛王の料の汲用ひられしに又傍に牛王堂の旧跡あり先山名水の其一なり

内膳村火踊

三世

霊水の傍に牛王の瀧と云ふ高五尺許尤美水なり別流あり

岸河神社　上内膳村に在り村中より坤方岩屋街道の西一町半ばかり祐号を福蔵と云ふ故に或

祭神三座　市杵島姫命　湍津島姫命　田心姫命　各銅像長凡五寸許

石鳥居額銘云　岸川神社大明神　當國十三社　延喜式に出る　其一なり

石田三成墓　右神社の東北間許田圃の中に高三尺許

味地草に曰三成の妾は納村の産なり久〳〵仕へ〴〵没落の時故郷に帰て居る

三成梟首せられ後に彼妾志を挙て五輪の石塔を営み亡跡を吊ひ然

るに石田は反逆の徒なれば世を憚て銘を勒せずと云ふ傳云此妾一子を生

終に農民に陪其末裔なるもの五六戸洪村に連綿として住せり云〻

書に云三成は淡海公の末裔石田次郎為久十代の孫なり為久元暦元年江

州栗津に於て木曽義仲と射落せ軍功によりて頼朝豆州にて三千

町を賜ふ九代目石田左助重成江州に住して荘園少を領し其子三成始佐吉と云

なり江州三重院の少童となり十八歳の時豊公に仕へ五千石を賜り祐筆と

勤む後佐和山の城廿三万五千石を賜ふ慶長五年謀反軍敗して囚られ其黨

小西行長安國寺恵瓊は同年十月朔日六條河原に梟首せらるゝ也

小原薬師堂　同村にあり先山に登る南の坂口あり俗よかんくの薬師と云ふ古佛立像長一尺寺許

当坂道は至つて嶮岨にして難所なり

先山　笑茂郷の上にあり本道は東の藤下内膳村より登る行程十八丁にして絶頂寺境にあり南麓は

上内膳村より登る坂路十八丁難所なり北麓は安坂村より登るあり

味地草に云先山の絶頂五合通りは安坂村三分通は下内膳村二分通りは上

内膳村に属に故に津名郡三原郡の両郡に跨る然れども古書は津名郡先

山と記せり事見へられば先山は安坂村に基と云〻

絶頂は寺にして千光寺と号に當國第一の霊場なり洲本より行程凡一里許

三上嶽　下内膳村より先山は登る九丁目の傍にあり山神の小祠あり

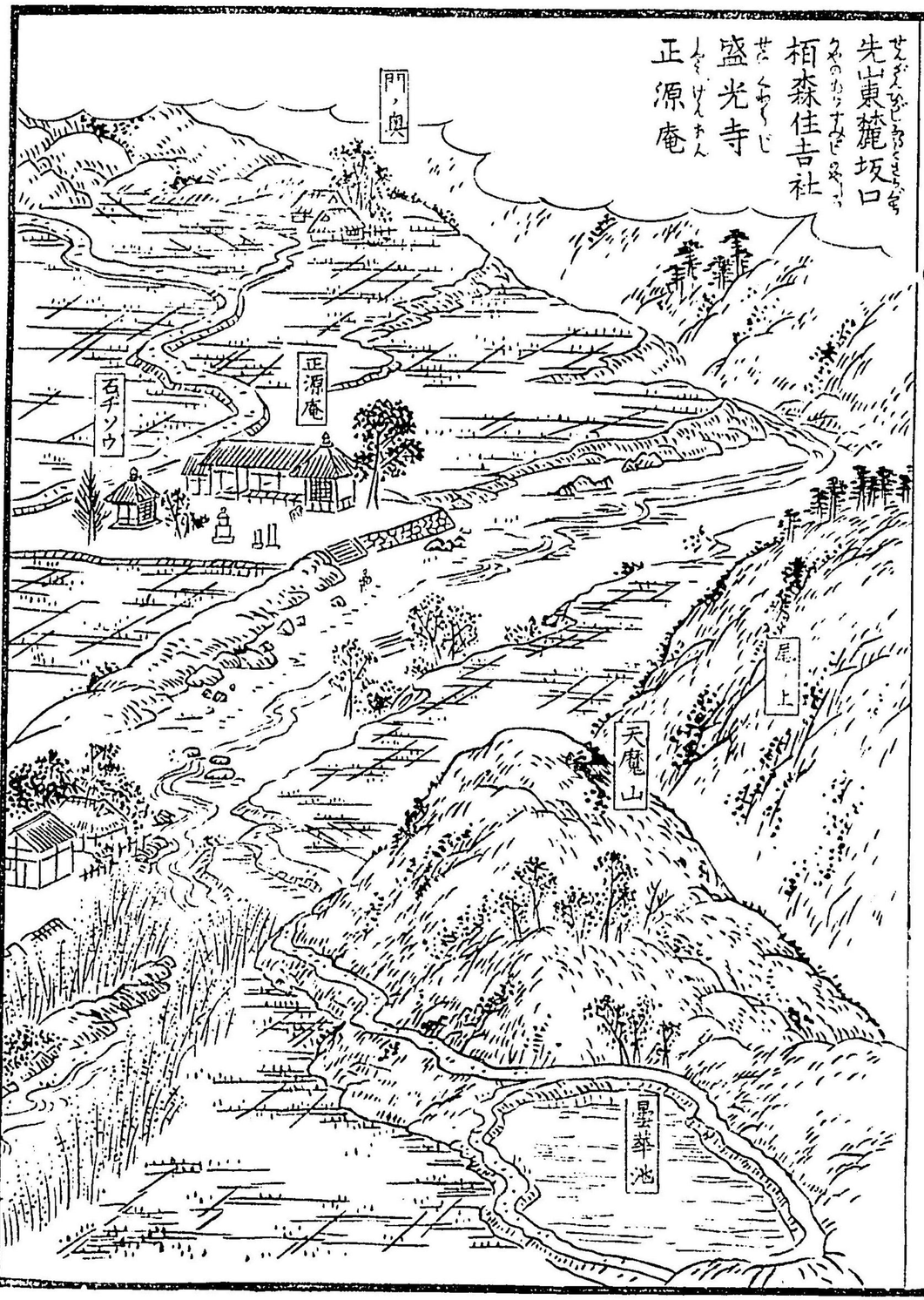
里俗云毎年大晦日に龍燈上ると云

神代系圖曰伊弉諾尊淡路國三上社

天地麗氣記曰豊受大神自天降於淡路國三上嶽三十二神從

之後遷丹波國與謝郡真井原宮春秋二百九十萬六千百七

十年也倭姫命又移坐之伊勢度遇宮云　一説に三上は此先山の旧名なるべしと云


先山東麓坂口
栢森住吉社
盛光寺
正源庵
門ノ奥
正源庵
石チソウ
尾上
天魔山
墨華池

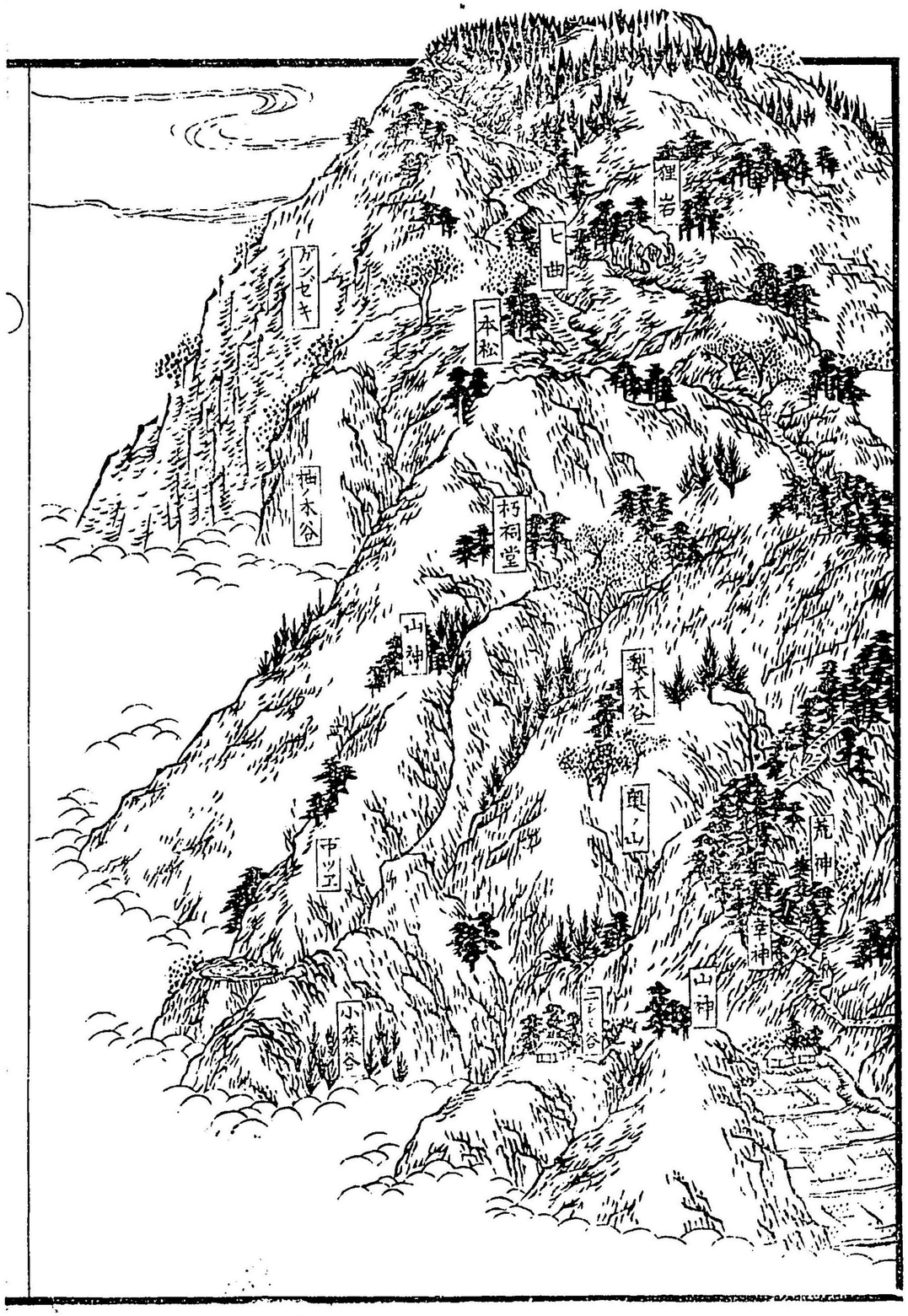
先山坂口
肩白谷
上ノ池
住吉社
盛光寺
御旅所

其二

洲府十二景之内

先山落照

島中中嶽是先山、秀氣西踵
雲霞間道度盡行日休所、庸
庸群動息勞艱、



蛇目石 同九丁目南の谷底にあり

七曲 十町目より以上をいふ

泥亀石 十四丁目道筋より左の方にあり 大サ亘り九尺許圓形之

狸岩 泥亀石より乾の方に向ふ山腹に大洞の岩あり むかしは古狸すみて往來の人を犯しけるといふ 岩の高凡三間余

清淨皇院千光寺 先山の絶頂にあり 本尊觀世音は當國三十三所順拜札所の第一番なり 界内すべて殺生禁断なり 麓の諸村に門下の寺十二區あり 無本寺

往昔國主興源院殿の御時寺領高五十石采地寄附し給ひ

南溟院殿の御時諸堂再興し給ふと云

本尊 千手千眼觀世音菩薩 長凡六尺 本堂七間四面 先山千光寺の額を掲く 黄檗木菴筆

護摩堂 本堂の左行廊よりつゞき列ぶ 本尊千手觀世音 馬頭觀世音 聖觀音 不動明王 愛染明王等を安んず此も古作なり 正面に額を掲く 其文曰

當閤御再興阿淡兩國前大守源至鎮卿長子松平千松殿

三層宝塔 本堂の前左の傍にあり

香爐堂 本堂の前にあり

石猪 石を以て猪の形を刻み神社の狛犬のごとく堂前の左右に置り 是は當寺本尊かりに猪と化し給ひて狩人忠太を發心なさしめ給ふ由縁によりてなるべし くはしくは縁起の所にあり

六角堂 六地藏を安んず 護广堂の後にあり

稲荷祠 金毘羅祠 聖德太子祠 出現杉古木 これは本堂の右の傍にあり

經藏 出現杉の傍にあり

二神宮 伊弉諾 伊弉冊の二尊を祭る

天照太神 八幡太神 丹生神社 これも經藏の右にならぶ

鐘樓 丹生社の右の傍にあり古鐘之

鐘銘曰

淡路國 日本最初先山鐘也

願以此功德 平等施一切 現世无比樂 後世至極樂

弘安六年 歳次癸丑 二月十八日奉鑄之 大工平貞弘

本願主佛子忍阿彌陀佛 助成沙彌妙德 當願主別當忍聖比丘 西阿彌陀佛

當國一乱時此鐘既可下賣定畢爰安宅秀興成本願買留奉寄進所也 永正十六年己卯六月十五日

弘安ハ後宇多天皇の年号也 大工貞弘ハ安坂の冶工なるべしと云 永正ハ後柏原天皇の年号 足利義植将軍の時代なり 當国一乱ハ三好氏より劫奪の時なるべし乎 安宅秀興ハ炬口の城主なりと云

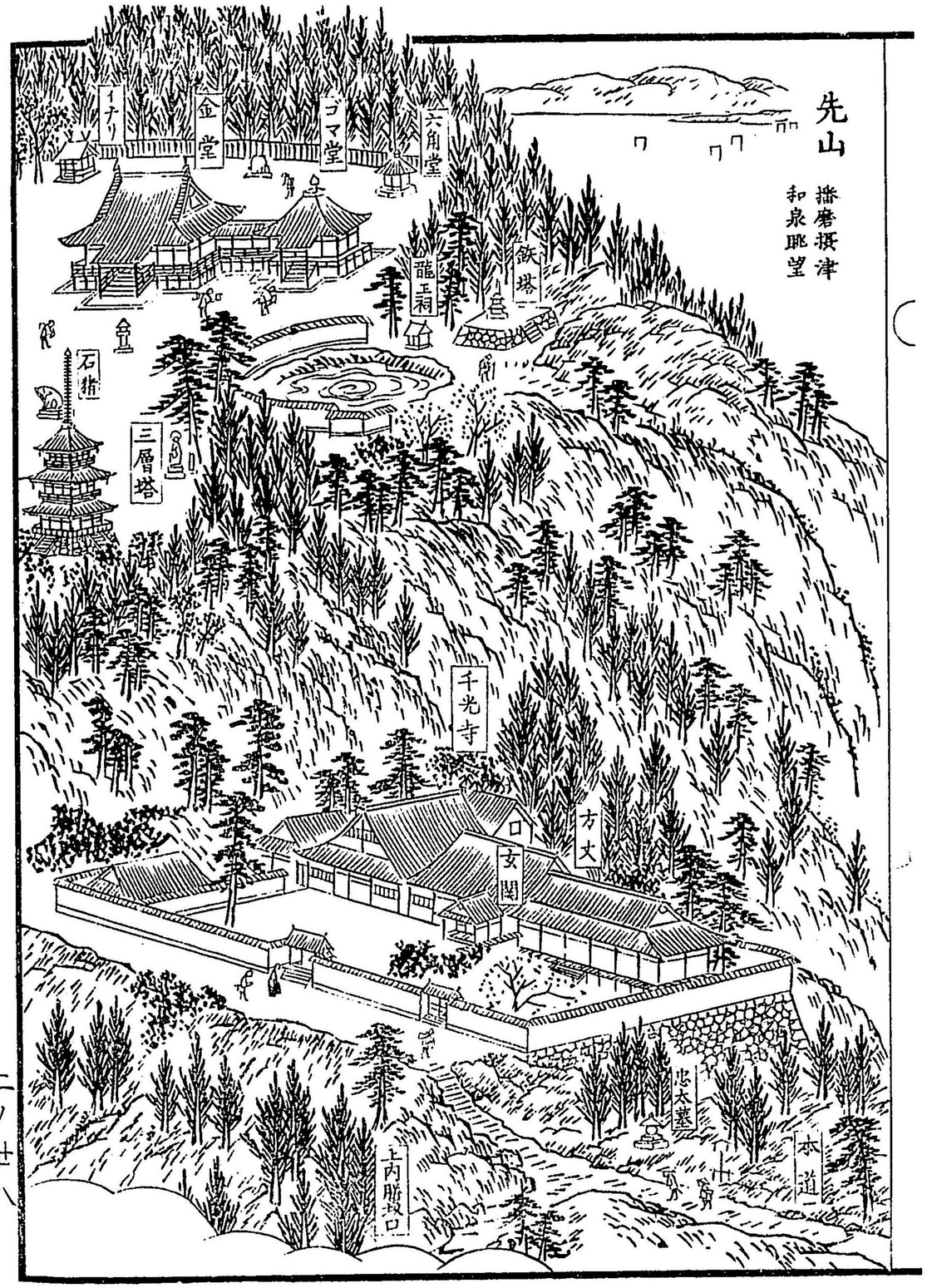
味地草按ずるに云 其頃ハ軍役夫を寺家よりも出せしと見へ 當山衰廃のおり其料に倦て鐘を賣て是を調進せんと議せられしを 炬口の城主秀興ハ軍役夫料を償ひて鐘銘を彫そへられしと見えたり 又云 秀興ハ監物と号して炬口の城主なり

鐵塔 龍王祠の後にあり 俗に地獄の釜といふ 薄く鉄を以て塔の形を鋳る 當時其半体を存せり 文保二年戊午八月日とあり 前後の銘文磨滅して詳ならず

鰐口 銘云 大日本國最初淡州先山千光寺鰐口 天文十五年丙午六月晦日 住持權大僧都隆旭本願淡州住快順大工炬口鋳師藤原吉家并源三郎

岩窟 本堂より五町許南の谷に下る所なり 則ち上内膳村より登る坂の傍なり

叅詣日 四月三日 九月十六日 十二月晦日


先山
播磨摂津
和泉眺望
金堂
ゴマ堂
六角堂
イナリ
鉄塔
龍王祠
石猪
三層塔
千光寺
方丈
玄関
忠太墓
本道
内陣口

讃岐備前
小豆島眺望
金ヒラ
太子祠
出現松
三蔵
三神
八幡
丹生
鐘堂
石猪
香爐堂
二王門
茶堂
西茶ヤ
東茶ヤ
安坂口
寺在日東開闢山
崢嶸紺殿白雲間
一州堪指駈人掌
千眼長輝薩埵顔
仙鹿縱從湖際至
老猿難向塔尖攀
貝鐘聲散松杉鬱
磴道且尋樵唱還
睦齋

詣人平生ホ願ハ[illegible]別ト　此祭日ハ遠近より聚集して山中の賑ひ[illegible]言語ホ絶ヘ[illegible]
千光寺供養ハ[illegible]樂の法會行ハレ[illegible]賀集山の記ニ見ヘタリ今ハ此ル絶ヘ[illegible]

當寺往昔ハ頗る大地ホ[illegible]堂舍許ヲ山中ホ満[illegible]今尚堂の跡門の趾ヲ[illegible]
[illegible]古蹟山中諸所ホあり事繁ケれバ畧之

當寺略縁起曰

夫當山ハ此界ノ手ゴ開けざり先ヨ伊弉諾伊弉冊二神天上より海底ホ大日ホ
種子　是冠字ノ　現ずると照覽[illegible]ハ怪[illegible]天降ヲ天浮橋ヨリ逆鉾と下し探り
[illegible]其鉾の滴り凝ケまりて嶋となるとあそぎとと言ひ[illegible]の國と号ヒ
當山ハ御鉾の[illegible]一滴先ヨ凝ケまりし山なる故ホ先山と号ケ而[illegible]二神此國
ホ降らセ給ひ一女三男と生ま[illegible]後終ヨ山中の岩窟ホ入窟[illegible]給ひ[illegible]三會の曉
と待ま　今西南の山の[illegible]ホ　又東の三上ガ嶽ハ外宮豊受皇太神天上より降らセ給ひ
五十萬餘の春秋と送りま[illegible]霊峯ホ[illegible]又本尊観世音ハ延喜元年播磨國上
野　今の林村と　ホ[illegible]為篠王と[illegible]大猪　横一丈許　背ホ篠生茂り恰も小山の如
くあるもの出ケり時ホ猟師忠太と[illegible]ケる者ひ[illegible]是と射る猪ハ矢と負ホ[illegible]



海ヨ飛入机の浦の浅瀬と渡り[illegible]此山中ケ分入忠太ハ流る[illegible]血のひとと暴ひ[illegible]
追ひけ[illegible]山中ホ分り血の留まる所と見ヒバ大樹の枝の虚の中ケ長六尺餘
の千手観音忽然と立セ給ひ光明赫々と[illegible]四面と照り忠太ヨ[illegible]見
る射る所の矢此尊像の御胸の間ホ立ケり忠太あゞろ感涙と流し直ホ
立る矢と抜ヒ[illegible]携る弓矢と折髻と切[illegible]菩提の道ホ帰し法名と寂忍と
改む此霊験世ホ満[illegible]延喜帝伽藍建立の宣下と諸國ヨ下し給ふ寂忍
法師勅許と蒙ヒ千里の檀門と招ケ七堂伽藍成就ケ今の本尊ケれ作り誠
ホ末世相應の大教主霊験日夜ホ新ケなる事挙[illegible]量ケ[illegible]其尊容感心
とあ[illegible]ケ[illegible]拜[illegible]知べきりのなり　云　云

狩人忠太墓　僧房の下の方　道の傍ケり

俳諧墳　十八丁目ニ[illegible]御影石惣高五尺許　石面三交舎艸秀霊服ニ　安永四乙未年門人及親交輩建之
裏の文ニ俳諧墳　右の方ニ辞世の句

秋植ケ名と万年の後ケ春　江國寺逸渓和尚筆ニ

艸秀ハ初芳と称ケ後二字ヨ分ケ艸秀と云　生駒氏　旧姓　角村　一交舎　別号　一陽房

洲本の人ゝ俳戈絶倫あり求驢齋富天淡々の師と仰て半時庵淡々の流と唱ふ安永四年秋剃髪一句を吐く曰

秋と知る天空とゝ幾くもなりにけり

寶暦の末浪花ゝ居を移し〳〵師の道統を継来野無の号と襲ふ茲ゝ於て雷の如くゝ裏きその門下ゝ遊ぶ者其地の青螺泉明と魁とし〳〵願る多し安永四年十月廿享年四十二にして歿を城南一心寺ゝ葬る生涯の撰集多し

**松龜寺** 先山の北麓安坂村ニあり能満山密厳院と号し本尊大日如來安阿弥作と云共ニ不動尊観音尊を安置し弘法大師の作と云當寺は旧今の寺地の東五六町許岡山ニあり

**閼伽井寺** 同村ニあり礼松山と号し本尊阿弥陀佛長二尺許共ニ不動尊と安置し行基の作と云山中の石ゞ谷堂屋敷とし地より慶長中ニ轉移せりと

**閼伽井** 堂屋敷より右の谷を経て岩間にあり是より右寺号ゝ用ゆ 先山観音堂と去る三町許

先山古記曰往古當山の住侶某道徳の剛へあり一朝此水辺ゝ往て法水を汲んと欲し然るゝ僧より先ゝ天童来て頻りゝ水を汲む僧の曰何人ぞ哉天童答へて我ハ書寫山の性空大徳ゝ仕ること數年あり將播州より此水を汲求ひるるも數回ありと又一日僧のいへ何ゆへ彼灵山の水を汲ざる哉と



向ふ天童の曰書写山ゝ又灵水ありと云へども是金剛一部の水ゝ此水ハ則金胎兩部の無二の法水あり又他ゝ在ることを示と得て直ちゝ一寺を灵水の辺ゝ営み閼伽井寺と名くと云云

**白山祠** 先山の麓奥畑村ニあり若宮荒神共天の祠本社の左右ニあり 例祭正月七日

**正遍寺** 同村ニあり称應山宝珠院と号し本尊阿弥陀佛長二尺五寸余 並薬師佛と安置し此地より先山へ二十町許 同村ニあり先山より安住寺ニ通ずる道垣離かを川の水上一町許ニあり

**比丘尼岩** 道路の上ゝ大岩累り覆ひ物まことに奇異の里俗傳へ云往昔西國の尼僧某先山ゝ詣んとて安住寺坂より爰ゝ至り此岩壁ゝ魂を休め是より進むを得ざ而一〜十四五町許引之て安住寺村の境高き所ゝ先山を遥拝し華を供し置て飯を乞ふ故ゝ其處を今ゝ花立の脊と云比丘尼岩の名義是より起ると云

**準眠堂廃趾** 納村の岸川の岡の下由良岩屋ゝの官道の分路途の傍と順礼堂と称し誤あり 準眠佛母観世音の堂ニあり趾と順礼堂と云

**岸河** 水源奥畑村より出て上内膳村を経て納村の岸河より鮎屋河の下流ゝ入

**納古城跡** 納村ニあり村中の北ゝあり高き丘あり羽風山と称し城山と称し本丸巨十五間ばかり圓地にして此辺りの高峯に本丸の坤の方ゝ二間ばかり低き所に馬責馬場とあり長三十

間巾十四五間又巽の方に一段ひくき平地と二の丸と云長二十三間巾七間斗あり又巽の方に一段ひくき所是と三の丸と云平地の長サ十五六間巾五間余又巽の山裾に本城の跡のこれり城戸大門ホあぐの存せり古城の姓名
詳ならず

堀氏邸地　右同村の南長瀬と云處にあり方一反許あり其名と伝失ひ按に中八木大土居の家臣ありと云

石田三成側室墓　同村にあり五輪の高サ凡三尺五寸計左右に山桜の木あり

里老の傳説に云文禄中此村某の娘あり幾内に出て石田治部少輔三成の側室となりて江州佐和山に住し三成に従ひしが慶長五年三成関ケ原合戰謀反敗軍の時其側室は三成の嫡児と懐妊して故郷の納村に忍三成同年十月朔日京都六條河原にあらはれ梟首せられしと聞て側室これが為に上内膳村岸河の森の前に菩提の為に密に五輪の塔を営み建り然れども三成謀反の悪名ありに依て姓名を記さずと云又云此側室其後に女僧となり宗心と称し石田が亡霊の子に其兄なる農夫の子と撫育して今も其地の祖号石田と称し家居六七戸ある處是なり則石田が末裔と云宗心は一庵を結び長く称名の菩提を弔ひ



くるに後二十年許あらずして身没なるよし是其古碑ありと云五輪の面に勒して云　空風火水地　月懲宗心禪定尼　元和四年七月五日

慶長五年より十九年の後なり

東北山観音堂　金屋村にあり當国順礼の札所にて観音ちくれと守護ス倒年六月十六日夜法會にあり群集して賑ふ

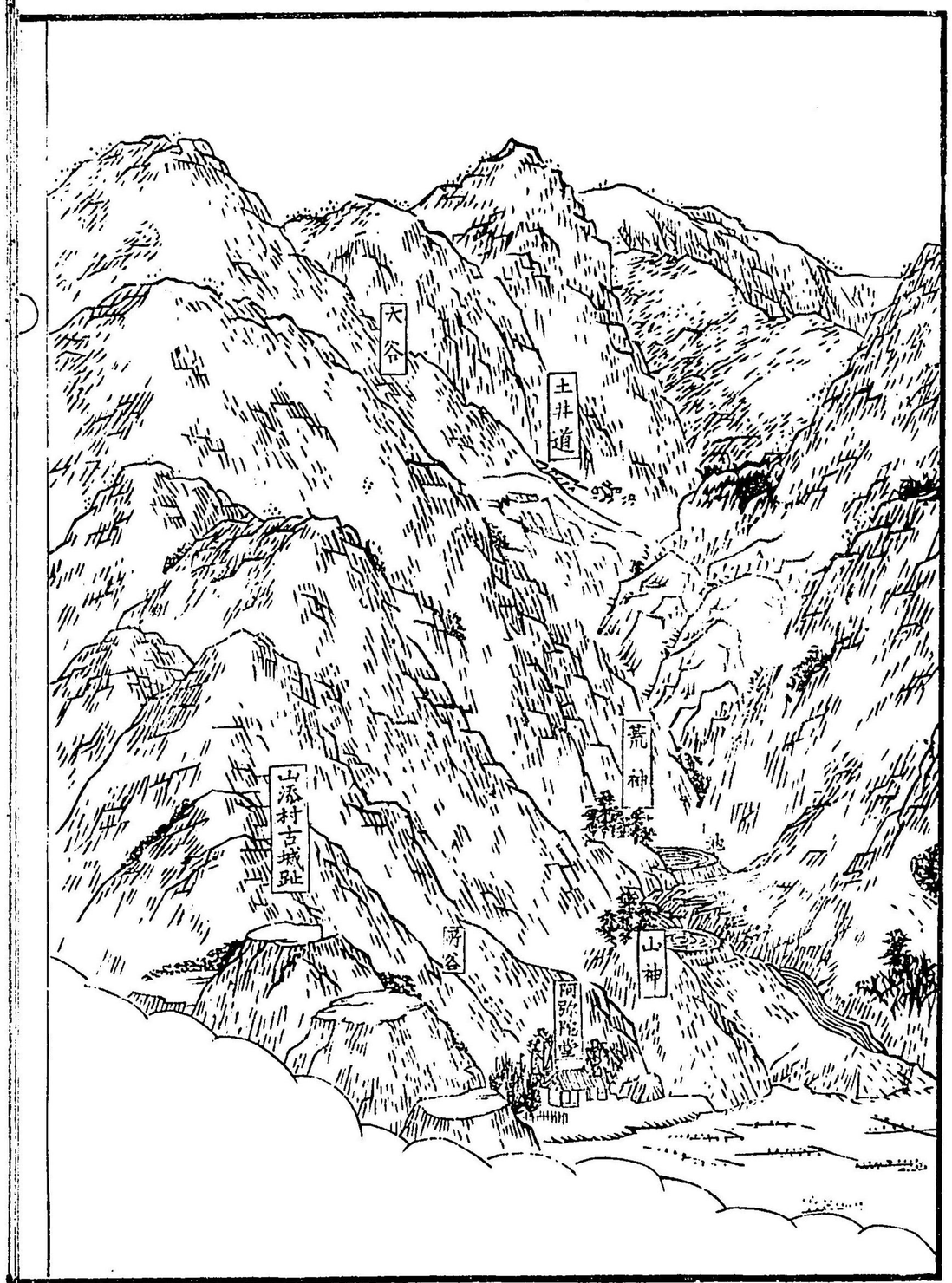
當地は往昔東北山千福寺と云寺家は一乗院福藏坊東坊西方寺阿弥陀坊薬師坊等にあり大地あり今は残らず廃して観音堂一宇と建立し観音寺一院又ぶに存ス堂の柱に古牋にあり左の如し

父母のゆゑに廣田の紀　永正十年癸酉冊後□同内方

○淡州三十三所巡礼二番　弘法秀岩

わすれもいでよとあるべき　二月十七日　始之

右文字の内丹後の下の字章分明なれば一説此掛札は當州巡礼を考善と云法師なるべし發起しる時阿万上本庄の城主郷丹後守同内


大谷
土井道
荒神
山添村古城趾
阿弥陀堂
山神

羽風古城蹟
先山
豆一十五間
五間三北間
七間三十三間
五間三十間
山神
平
所古城ノ正面ナリ
石田墓
矛拓て
弓の巣のさろ
水来ニ乃耶
湄川

室の施主〻て三十三枚の札を寄附あり〻也と或云當國巡禮八木
府城の時女僧某の始る處あり〻と云り〻秀善ハ尼僧の名あり〻尤
三十三所の札所毎ゑ此掛札ひるべられども多くの星霜を経て今僅ゑ
此寺と上本庄の神宮寺とのみ存せりと云永正十年より嘉永五年まで
三百四十年ゑ及べり

**観音寺** 同所にあり東北山一乗院と号し本尊十一面観世音立像長二尺八寸許弘法大師作と云
太神宮社本堂の艮にあり

**當山〻〻大地あり〻時ハ金屋供養とく舞楽の法會行はれ〻とぞ賀集山**
**の古記ゑ見へ〻り**

**新宮祠** 右同村にあり熊野新宮権現と勧請し社僧観音寺
例祭三月十三日 九月十三日

**鑄面松岡古趾** 金屋村にあり廣田八幡宮の陰〻廣田庄金屋村住松岡五兵衛尉藤原
真清と銘を勒し當村〻〻名鍛冶なる故ゑ金屋村と号し又
村中に金屋の原ホの畝号あり〻〻ふにより
の原ホの畝号あり〻〻ふにより

**勝間古城** 同村の北にあり畝号と城の腰とあり〻高サ六間余頂上平地七畝許
今田圃とある城主姓名時歴詳あり〻

**山添古城** 山添村にあり畝号中堂〻〻ふ長田川の上手〻て平地より一壇高し東西廿四間
許南北十五間傳云船越某の居城と〻ふ



仝

同村にあり城の臺と〻ふ中壇の丸山〻納村羽風の古城と去ること凡六丁余頂上三四の
郭あり本丸の東〻て二間半許低し南北五間東西四方の平地〻出丸東の丸より又東の
東の丸本丸の東〻て二間半許低し南北三間東西二間半の平地〻一説に當城主ハ中八木細川の家臣加藤主殿
方〻壇あり二間許低し南北三間東西二間半の平地〻一説に當城主ハ中八木細川の家臣加藤主殿
助某居住〻〻

**阿彌陀堂** 古城の後所谷の口にあり本尊阿弥陀佛長八寸許立像木佛ゑて作末詳
里老云加藤主殿助信仰の佛像ゑり自然石六地藏并に古碑あり天文十一年
又天正六年の年号と勒し

**廣田郷遺趾** 今三原郡廣田村〻〻ふ有是其遺跡〻〻〻津名郡ゑ属せしゑ後ゑ三原郡
隷り左廣田郷と養宜郷ハ一の山嶺を隔てこれを西郡の界とせしと宜あり〻〻れ
ども今廣田も八木も三原郡に隷〻り
古今の異同諸国ゑ例ゑ多〻〻

和名類聚抄曰淡路國津名郡廣田比路

東鑑曰壽永三年四月廿八日平氏在西國之由風聞仍被遣軍
兵為征罰無事御祈禱以淡路國廣田庄被寄附廣田社其御
下文付前齋院次官親能上洛便宜可被遣神祇伯仲資王云

寄進　廣田社神領事

在淡路國廣田領一所

右為増神威殊存祈禱寄進如件

壽永三年四月廿八日　正四位下源朝臣

按ずるに此書は鎌倉より源頼朝私領の中淡路國廣田の庄田と攝津國廣田社へ寄進せらるるなり是文の如く平家追討の軍中祈禱の為ゝ之則ち其下文を京都ふるの神祇伯白河殿へ遣ゝ廣田社へ延喜式攝津國武庫郡廣田神社と云り日本紀に天照太神の荒魂と云ふ後世二十二社の内に云ふ仲資王は白河系圖を考るに花山院の皇子清仁親王の後胤なり神祇伯正三位と云ふ故に神祇の事を掌る殊に此人廣田の神社を崇敬せられ毎年廣田社奉納の和哥かと奥行せらるるなり源朝臣は頼朝のなりされば鎌倉より右神祇伯へ下し文を遣はされしなり

東鑑曰壽永三年十月廿七日淡路國廣田庄者先日被寄附廣田社之處梶原平三景時為追討平氏當在彼國之間即從等乱入彼庄妨乃貢歟仍仲資王被申子細更非改變儀且可下知景時之由今日被遣御報云云

東鑑曰文治六年四月十九日造太神宮役夫工米地頭未濟支頻有職事奉書神宮使又叅訴之間可致不日沙汰之旨下知給於有子細所々者今日令注進京都給云云

## 淡路國

### 廣田郷

下知大和前司重弘其狀相副之

○尚重弘廿二日卯使〻〻上京のよし見えたり以上は廣田庄と廣田郷八幡宮へ寄進せられし事と心得る人多きとなり廣田神社攝津国にあるを委しく注せり

宮村河　廣田宮村山添村より流れ中筋川に入

廣田池　廣田宮村にあり當八幡宮にあるは小宮村と号す廣田郷十四ヶ村の生土神

宮村池　同村西にあり大池と称す宮村の南にあり

廣田八幡宮　同八幡の東の傍にあり廣林山蓮華院と号す八幡宮社僧

大宮寺　大宮寺の後の山にあり一説に昔精舎堂塔ありて奥院と称す其礎石今尚存す故に地名を堂所と云

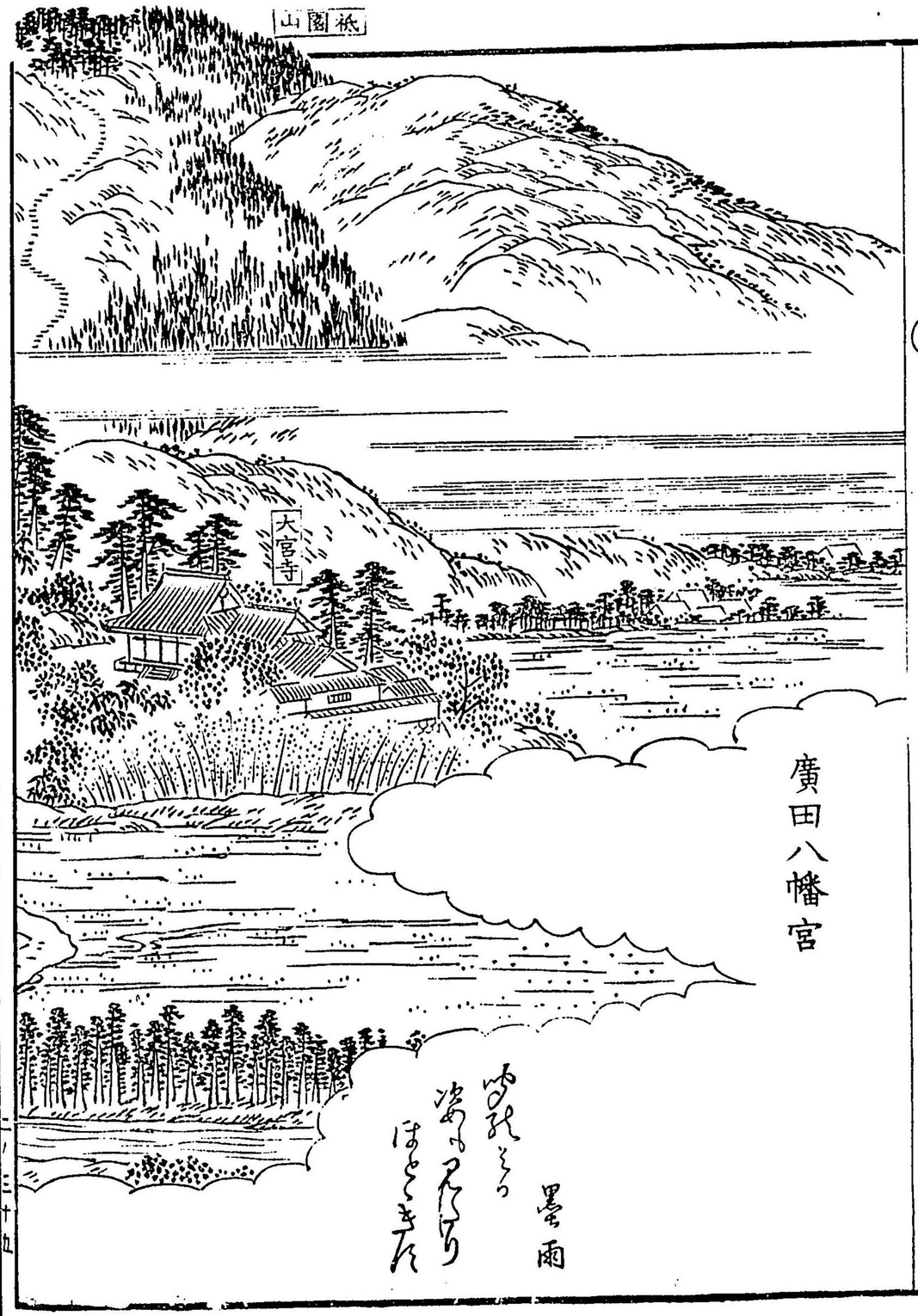
祇園山　中頃牛頭天王の祠を営立しにより俗に祇園山と云ふ

祇園祠　同所にあり牛頭天皇を祭る例年六月七日十四日もまつりあり

社僧　廣林山大宮寺

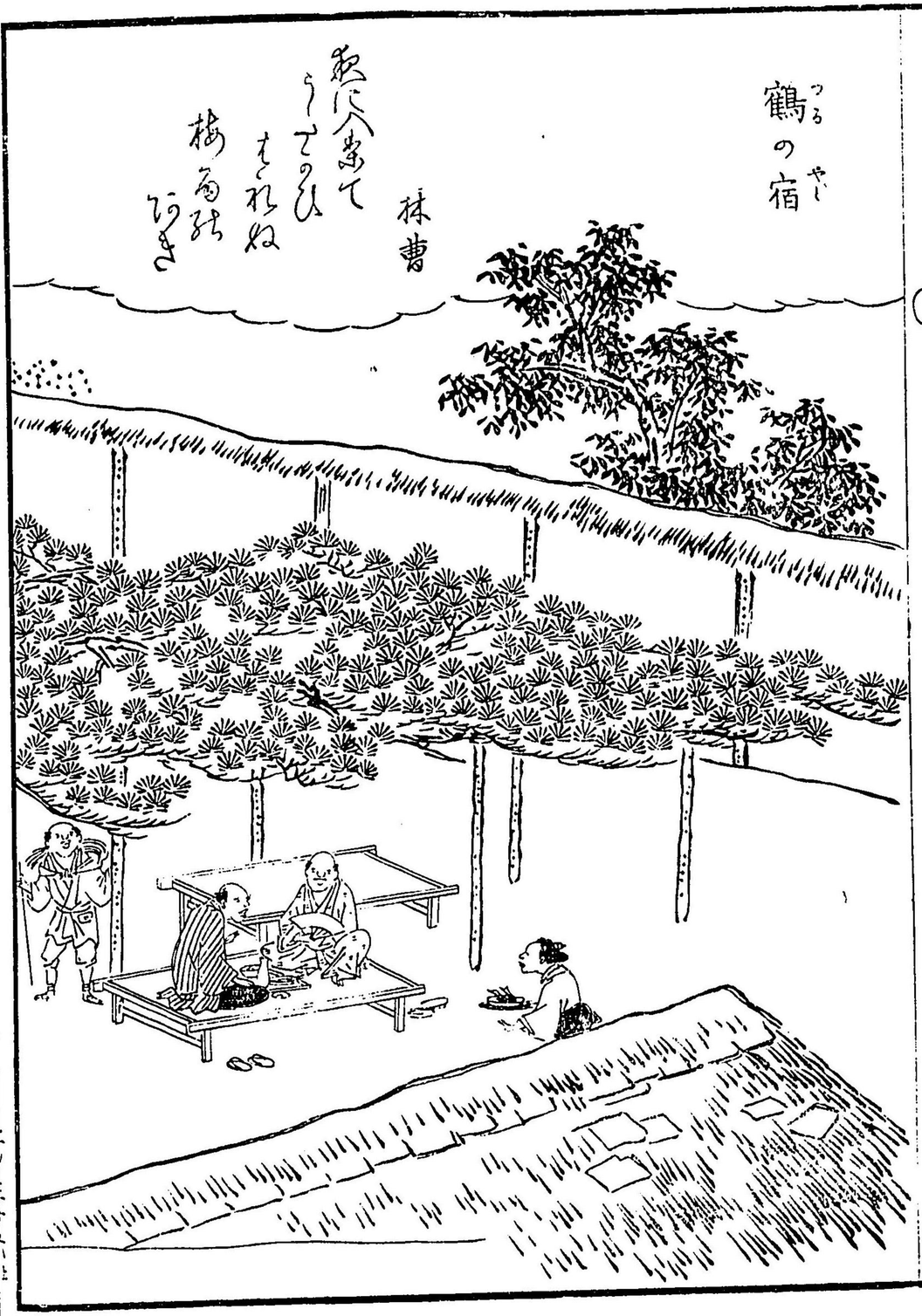
観音堂　山上にあり

八幡宮


祇園山
大宮寺
廣田八幡宮
墨雨

鶴の宿

林曹



偃蓋榮於秦大夫
主人抱酒四時娛
老松之下多仙客
自是風流德不孤

右贈鶴宿樓主人

壽亭

廣田清水　同村街道の傍にあり清泉にして増減あり

釜ヶ淵　内ヶ谷の水地の東の方に落長田の道條に高サ二間許の瀧とある所とも一説に云へり大なる蟹美婦に化して往来の人をあやまりてあり其故に蟹がふちともよぶとぞ

古城蹟　同村猪の木谷の東にあり直立十間許の小山と宮道初尾川と渡れば北の方に見するあり初尾川の城山の巽と周りに北流に城跡に礎石尚存に姓名詳あらず

中田觀音堂　八幡の鳥居の北二丁許にあり本尊正観音立像長二尺許三好の家臣中田越中守某念ず佛と云

愈之森　古城の東北四丁許にあり平地の中に表あり藪垣の陰にあり清水あり愈の清水と いふ荒神の石祠ともに林中にあり

里俗云往昔五六歳の童男童女他の兒童と交へぶ〳〵平生此森に来睦じく遊ぶ双方両親是を見て夫婦の機にして婚姻に夫より〳〵愈の表と唱ふ今も夫婦の中あしき此森に祈まゐ験ありと云故人の歌とて

あらべなる愈の森の雫にぬれよとある人の袖もぬれけり　よみ人しらず

中條川　水源中條村の支邑大戸より出て宮村山添村納村に至て鮎屋河の下流に入

蛭子社　同街道の傍にあり右神旅所の向にあり

里人云當社にて〳〵頗る大社にて〳〵壮厳なりしかども天正中四禄にかくれ今の如く僅の小社となる此地名を市場と云へり按に古此所に市を



て市を立てしなるべしとぞ神像は浪花の佛匠某霊夢によりてこれを造鎮座せるに又水晶の色せし大さ密柑の如き宝珠にて是も此佛匠今宮の蛭子社に詣でる帰路の時奇吳に得たる宝珠なるを像と共に納めと同じ

鶴の宿　同村街道の傍茶店の庭にあり大樹の蓋松にして高サ凡六尺許枝葉四面に繁茂して其周廻凡十六間余号して鶴の宿と云樹下に標石にて句を勒して曰

いくへ春の美どり重なる鶴の宿　自芝山題

右茶店を鶴宿楼と云街道中の奇観なれば往還の旅客これを観物とす

初霜岡　同街道の東にあり老樹の枝木の下に季秋十三夜霜ありて粉と施にがごとしと云

不動菴　同村にあり惣持山真如菴とも云本尊不動明王は行基の作と云村長不動氏遠祖奥州より将来あり一像なりとぞ故に不動と以て姓氏に号に則村長の家の鎮護なり東の山手にて〳〵への城趾ありと云

古城蹟　右同所にあり味地草三云天文年間久米安藝守居住に此人旧奥州二本松より来住して其末裔今當村にあり不動氏と云

一書云長禄二年賀集山の古記に久米四郎左衛門入道道鎮の名見えたり

又同書に應永廿九年久米四郎左衛門尉家守とあり又文明年中三原十二士の列に久米殿と云あり

八王子祠　同村大戸に有り例年六月七日庚湯神楽　藥師堂　同村初尾に有り俗に風呂の藥師と云

鰛谷河　正月十四日七月十七日十月十四日等神事有り水源鰛谷村の奥より出て瀑布と経て中筋村大野村を過ぎ鮎村に至る

鰛谷瀧　鮎屋村に有り三千風文集に相野の滝と云又一説には浅野の滝と云

瀑布の高さ凡八間餘水幅大水の時十間中水一間半常水四尺餘淵の深さ八尺余其地樹木生繁り木々もしく僅か日光を洩て石崖滑かにして其飛泉雷ひびき龍踊るの形勢夏日の炎天といへども陰寒骨に徹し當國第一の飛泉といへり滝壺の内に洞有り洞口甚狹く内に至れば闊然として廣き事方二丈許水漣と得る者いまだ是を知らざるとぞ一説に此所を以て浅野の瀧と言あれども万葉集に詠るは磯辺に船を繋ぎて瀧の上の浅野の雉子の立ちとどまれと所なれば此地は海を去ること二里の餘或は三四里も奥まり山里なれば其意に合ず猶探に覓ん瀧の上の浅野は野鴫冨島のたりと求むべき据に思るとぞ

淡路古跡考云三原郡鮎屋村といへる浅野の滝と云有れども此地古歌のさまに叫ぶ後の人のあり堂に浅野と名づけるに誠の浅野の滝は机南村の濵より谷間より入る七八町奥に有り世俗ことに紅葉ヶ滝と云滝の辺に紅葉の大樹多き故なり哭滝は鮎屋の滝より少し細くて劣り

とぞ古哥に詠ぜし浅野の滝も疑ひあるべし云云

傳云昔此鮎屋の滝のもとに浅黄撥とて名花有り又四ぎ松とて有り

より里民の古哥に

音に聞く浅野の滝のあさぎよりに風も吹ぬに四ぎ松

不動堂　滝の此方上の方に有り満石山清滝寺と云へる係長凡三丈許弘法大師作と云

堂前に圓形の石あり満石と云

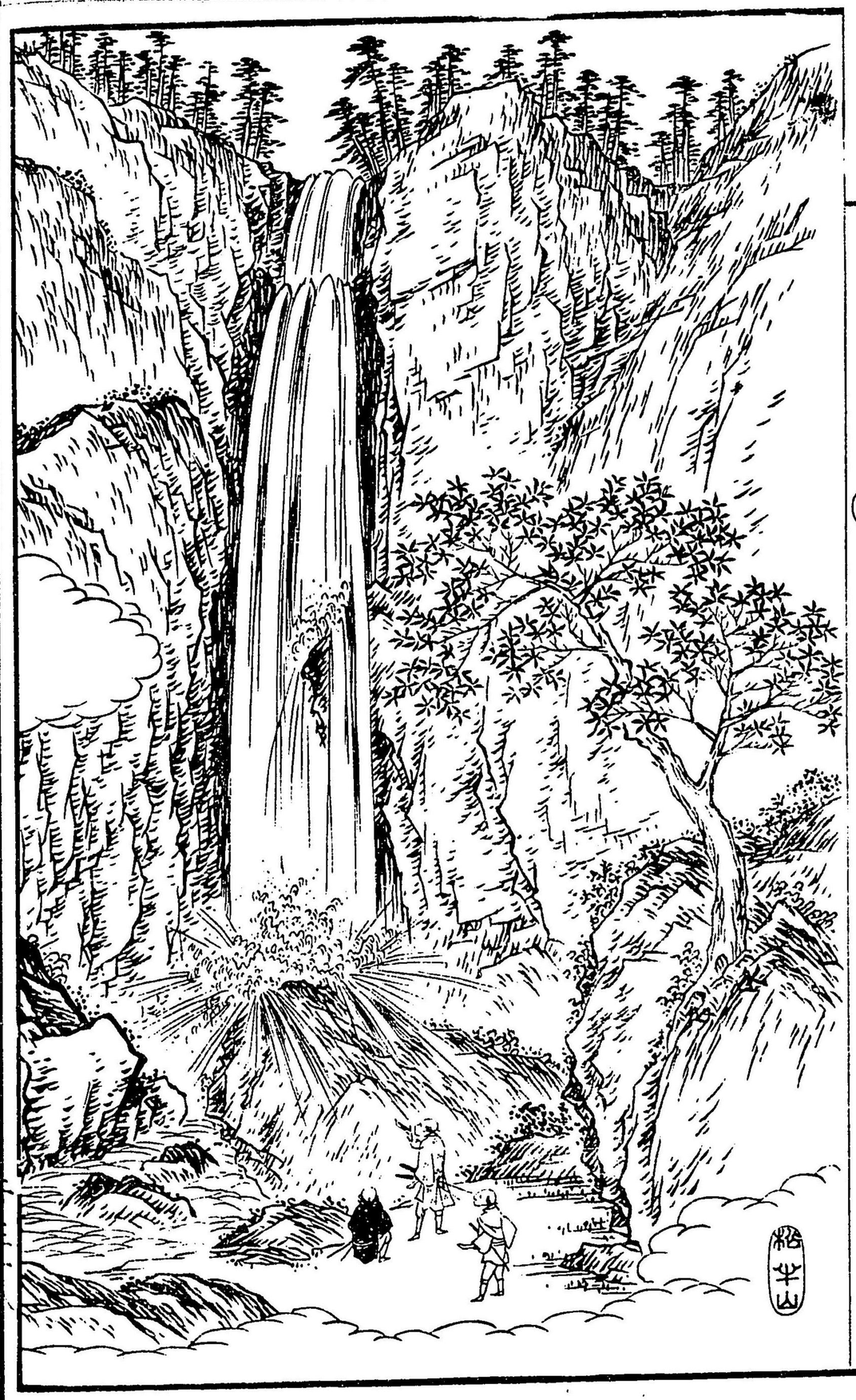
大泉寺　同村に有り本尊阿弥陀佛定朝作と云今は廢寺に成り大泉の寺号は滝の名と云

五瀬墓　同滝の奥五の瀬に有り前に云細川主殿の墓と安永中古碑と中八木の城趾

養宜郷遺跡　藥師堂の境内に移せり云故に今は無し八木に作る説養宜の假字なり郷は廢して僅に上八木中八木の両村其名を遺せり

和名類聚抄曰淡路國三原郡養宜夜木

養宜河　水源は馬廻成相等の山中より出て大久保門前池に入上八木鳥居の中間より中八木野原徳野の間より入田に流れ入田川と合流して桑川に入


紹平山

中山　上八木村にあり廣田の間の小嶺道とする説い

中山橋　同村の街道1架に

八幡祠　同村にあり往昔細河館主の再興の社とす　安楽寺これを守護せ

古城跡　同村の東南横谷の山中にあり大久保廃安国寺竜臥巖の上の方にかゝる傳云武田万之丞居住に按に阿那賀の城主武田久忠の氏族りや三好子黨の人なるべし

養宜館古址　中八木村にあり俗に大土居の城跡あり凡東西一町許南北二町許東西南の三方にあり南の許東西二方中程に矢倉臺あり堀高サ二間半許入口は東西南の三方にあり郭地乃本門にして往古橋と架に北の方に出入の口あり四方築地塚をめぐらし内に井水二ケ所あり上八木村の一の滝とする所より塚の水を引く溝形今に存せり廓の内は今田圃となると其中に社の変あり林中に小祠二社あり五瀬社以久社と記に又表の傍に藥師の小堂あり近世中八木の戒壇の表なりとも堂司の僧の云林中の二社は當城主を祭る所なりと又堂の傍に奇石の墨あり蓋假山なるべし遺跡あるべし乎塚の外の西なる築地と環らせる第の跡あり里老曰家臣小山田氏の宅地にして東西に家臣の第宅ありて郡主を輔佐せしぞ故に農商小月は郡の鼎は西に郡主は正中にと侃々あるべしと云ふ是は両臣と月と鼎に比しるべし又上居とは城廓の脚のことなるべし當国の城跡多くは土居と号す国の方言なり古語なる哉

當養宜館は一國の守護所にして其始右大將頼朝日本惣追補使に任ぜられ諸國の守護職と分ち置かるる時築せられ佐々木治島経高を以て當國の守護職とす　安澄古城記

東鑑曰　正治二年七月廿七日　六波羅書狀到來。佐々木中務丞經高作為帝都警衛人數奉輕朝威。條々也是於洛中稱生虜强盜人以其次追捕近隣民居等加之。令守護淡路國之間。幾如國司命妨國務之上。去九日催聚淡路阿波土佐等國軍勢各著甲冑令馳騁依奉驚天聽被尋問盜觴之處為敵欲被襲之由雖申之更無實證所行之企。奇怪非一。早可達関東之旨。及勅命云云上皇頻逆鱗云云

同八月二日　佐々木中務丞經高蒙御氣色淡路阿波土佐以上三箇國守護職以下所帶等被召放之以其趣所被申京都也云云

按るに比持は頼家の世なり北條時政執政

同　建暦三年五月五日　義盛時兼以下謀叛之輩所領美作淡路等國守護職横山庄以下為宗之所々先以牧公之可被充勲功之賞云云

此義盛と云ふハ和田左衛門尉義盛時兼ハ横山右馬允時兼なり謀叛の罪ニ依て淡路美作等の守護職とり放されしを

又武林傳ハ小笠原弥太郎長経淡路等の守護うと有兼久の頃と云れハ

共ニ実朝の世ハ執権時政の執権あり

同長経の五男修理亮長能下條三郎長親と相續ひて居住し國中の政道を正さしめうう是を八木の國府と名号と云 安澄古城記

道範上人紀行 仁治四年仲春四日炬口ハ着船の條ニ云

同日船より下て陸行三里淡路の養宜の國府ハ至り云云 是ハ北條経時執権の時ニ此時朝廷の政令行はれず古の國府ハ益々衰廃して養宜の地國府の如く有し

あるべし 此時も小笠原の氏族守護常盤草 其後九十余年を歴て延元元年南朝建武三年 楠正成湊川ハ戦死し新田義貞敗軍せしより後醍醐天皇叡山ハ遷幸しあり同七月義貞諸将と共ハ京を攻む此時阿波淡路より阿間志知小笠原の人々三千餘騎にて山門ハ参ずし又暦應三年南朝興国二年 新田義助南朝の勅を奉て伊豫ハ下りし時も淡路の阿間志知小笠原の一族武島より備前國児島ハ送

る然るハ同年細川刑部太輔頼春伊豫の官軍を征せん為ハ下向ス此時淡路ハ以上太平記

淡路の兵も将軍方ハ従ふ 大意

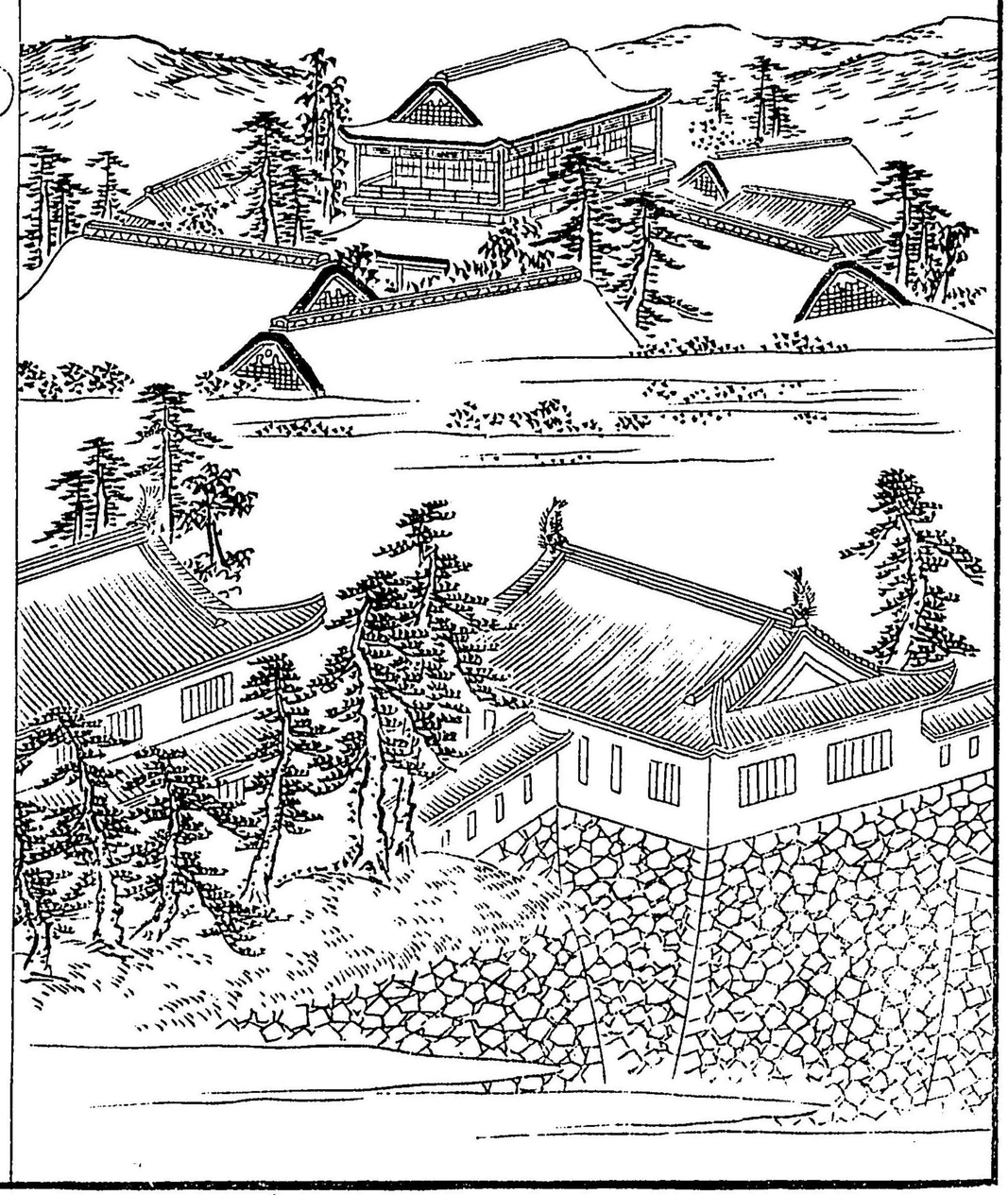
安澄古城記云鎌倉の世衰へ下知とあるハ人もあり守護職も来らず天下皆戦國とあつて國中の人々相共ハ合戦し面々ハ押領し太平記の大乱起り足利尊氏天下一統の世と切まるも既ニ将軍職とある後細川刑部太輔頼春阿波讃岐と領し舎弟掃部頭師氏ハ分地を与へんと尊氏ハ申れば尊氏曰分地と与へんハ我領地の減少なり幸ハ淡路ハ不ご手を入ス面々ハ押領し我ハ属ス弟ハ分地せば北度淡路へ攻入て一國を従へば其恩賞として是と与ふべしと兄弟隣國と治めんとあるべと有るべ頼春此由を領掌し急ぎ阿州勝瑞の城ハ皈ス弟師氏と大将として淡州退治の事を謀る時ハ

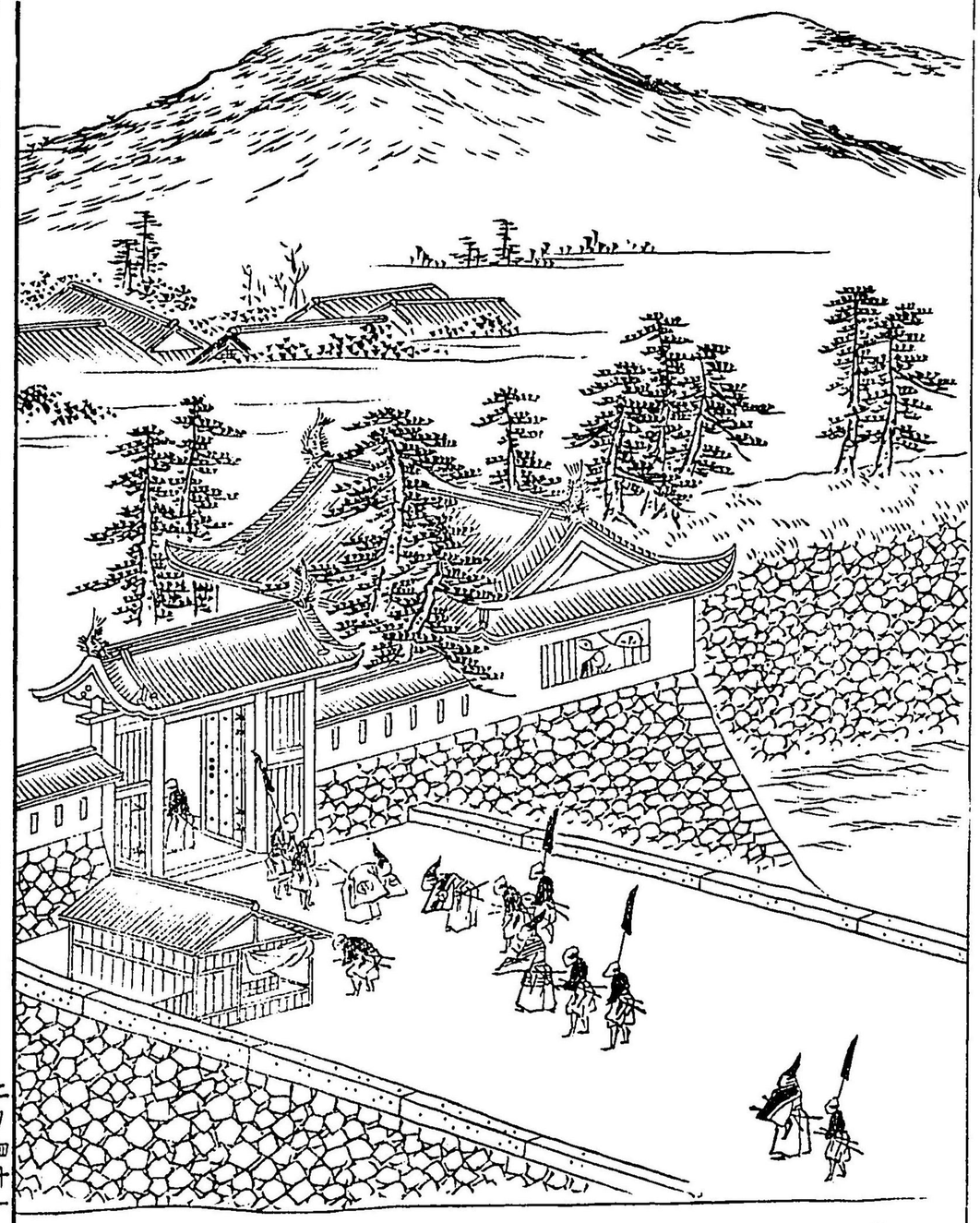
暦應三年の春ハ云云

古城記云細川成春ハ文明十七年五月十五日卒ス南陽院成伯栄公と号ス

其子淡路守尚春永正四年五月廿三日卒ス桂堂以久文公と号ス其子

やしきのやかた
養宜館
はんえい
繁榮





千鶴丸後ハ淡路守勝忠政道と勤るあり然るに阿波の勝瑞ハ先祖
頼春より數代相續し阿淡両國兄弟の家ゝ栄へくるゞ其臣小笠原
筑前守ハ世々一家老ゝ三好一郡と領ぜ故ハ氏と三好と改め後ハ郡
ハ威とるゝ勝瑞の主とも物の數とせぬ折あゝば主君の領と奪ひ取子
孫ハ傳んと謀る永正中勝瑞の主若輩の世ハ移て自然ハ威ハ三好
氏の手裏ハ移る三好ハまゝも英勇みして摂州河州ハて軍功とゝ
終ハ勝瑞の若君と毒害し其領國を我物ゝ夫ゝ淡州八木の
城主も兄弟の家系ゝ三好ゞ家ハ主家あり此事彼地へ聞へあゞ為
宜しゝ此次手に淡州とも攻亡ぞんと其用意とあゞ時ハ八木の城を
ゝ一町四方の廓あゞ先祖以來深き工夫とゝ成相の寺家と築く
建とゝまゝの時敵ハ取巻まん時ハ屋形と捨ゝ成相の寺ハ籠ゞ假
令百万の勢ハ攻るとも其口狭くて一騎あゝでハ通るゝゝ一方
ハ山一方ハ深き谷川ゝ其上入口の両方ハ高く聳へ山ゝ入んとる



時ハ山上より石を落し矢を射ゝ敵を皆殺しハせんす易かりあん
勿論本陣の寺ハ山深く敵の越来る道もあゝ甚要害ゝ仍て數
代の主此寺の金堂庫裏三社大伽藍同然ハ造ひ置るゝ皆佛法を
信ぜるのゝあゞ偏ハ一生懸命の期ハ望ん時の用意あり此ゝ三好兼
ゝ聞ゝる故ハ三好筑前守長光も工夫と凝し永正十七年の頃手勢
と二万兵船數艘撫艘の渡ハ粧ひ日々船を出して戻しゝるゝ數
日あゞば八木の細川より國中ハ觸流し三好既ハ勝瑞の家と毒殺し
又我城を攻んと撫艘の海ハ丹青の旗さし物見へゝ兎角國中へ奇
つけぞ支第一なると斯ゝ程工國中の武士一万余騎福良の浦に
出張し船の来るを待居るゝ三好ハ時ゝと兼ゝ申合せるゝ兵船
五六艘ハ兵百六十人許夜ハ紛ゞ阿那賀の海と渡り近道を急ぎて
八木御土居の城を攻掛ゝ城中ハ勝忠若君奥方人數漸六十人ぞ
ゝ男子ハ二十人餘戦ふも途方を失ふ三好ハ得ゝ

と松明を御殿の屋上へ投上げ攻入るぞ勝忠い若君ゐ老こる士又紛ぎ
子を乳母ゐ抱ゐせ鮎屋の五之瀬狩場の御殿へ落ゝりゐ心安ゝ
戦ひ内室も長刀ゐ〻四五人薙伏その身も手を負ひ勝忠と夫婦火中
へ飛入ゝ空ゝ成ゝり敵追々攻入ゝ大将奥方の死骸と見つけゝゐ若殿
の行去れば其内ゐ生捕の士四人ゐり此者どの言ゐるゐ若君の行去
知る者ゐらば早く申べゝ命を助くさゐゝば忽地ゐ殺害まべゝと
向ゐ此中ゐ山添村より出ぞゝ仕者落ゝるゐを知り居て弥一命
を助けるゝやといふ時ゐ其者を引退外三人の首を刎行去いづくゐる
哉と問ゐ若君両所乳母士の落ゝるを語る三好ゐ士さゝび其所へ案内
せゝて廿一人の士松明ゐゝ〻鮎屋の奥ゐゐる偖若君乳母士ゐど夜半
ゐ五の瀬ゐ引り敵退ゝば迎の士を遣へゝと大将の言ひゝと待て今や
迎の来るやらんと峯ゐ立ゝ居る程ゐ三好ゐ士廿一人件の縄付を先ゐ
立細道をつゝひ入ゐ松明の光り山の腹ゐ見へゝと迎ひと心得扇をひ

らゝき〻乳母ゐ知せゝも運の究めとひゝれあり三好ゐ士寄来るを見れ
ば各抜身を振ゝ見あれゝる貞もあゝ老士ゐ目くばせゝ若君を樫の
木の茂ゝゐ立添せ一刀を抜て命を限と戦へども女の可弱ゐ老人の力ゐく
終ゐ倒れゝゝゝゝば若君幼子い声をたゝ泣ゐぞ荒けゐゝも引出ゝ細首
を討まゝゝせ若君二人の首を引さげつゝ縄付を許ゝ置ゝ跡とも見ばゝて
八木の辺ゐ馳ゝる其間ゐ福良の人ゝ此由と聞八木ゐ飯り見ば館ハ烟とあり
今ハ戦ゝるせんゝゝと已ゐ在所へ引退くも夜ゝ三好方ゐハ此由と聞届ゝ
福良の夜勢ゐけ戻らば夜ゐ内ゐ阿那賀の浦とさゝて
急ぐまゝゝ抑御土居細川氏八代の城主終ゐ一朝の露と消ゝり暦應三
年師氏當國の主とゐりてより永正十七年ゐいゝる迄百六十八年許繁
昌の城下ゝゝゝゝ物の限ひりて跡ゝも無あれり今も五の瀬ゐ旧跡のと
り若君乳母老士の墓印あり云云
鮎屋村五の瀬ゐ小墓三三基分散ゐ然るゐ安永六年納村某大土居の古趾

三好の軍兵
五之瀬の山
中ふ養宜の
落人を襲ふ

紹半

薬師堂の境内は稜せり味地草

薬師堂 右城趾より本尊薬師佛座像長三尺許行基作と云草庵を圓藏坊と云

堂司曰寛文年中沙門省長是より三町許坤の方戒檀の木より稜し来り

延宝二年小堂を建るとぞ

五瀬祠 以久祠 右薬師堂の傍林中にあり五之瀬社は鮎屋村五の所にあり死し給る人々の霊を祭る又細川尚春の法号を以久文公と称されば以久社は尚春の霊を祭るなるべし云

相傳城主細川氏善射有名于時

蕭索秋風入故城満畦黍菽不勝情

昔時善射人何在雉兎空傳驍將名　釋妙一

大土居城跡

戒檀森 中八木村大土居の西にあり往古国分寺戒檀の趾なりとぞ近世を薬師堂なりと大土居の城跡に稜し一説に薬師の像なりと云ふ一説に戒檀寺村に稜しなりと云ふ誤なり戒檀寺なるは別なり

入田河 上八木村の東より出て中八木を経て入田より八木川に合流れ

古城墟 入田村の東にあり字を城山と云ふ城主の姓名詳ならず

笑原神社 徳野村にあり延喜式神名帳に出る三原郡四座の内なり今東宮明神と云ふ同村の西に西宮明神と云ふあり是に對して東宮と云ふ社記及び惣社の記に祭神素盞嗚尊と云ふ

犬馬塲 同村の支邑野原村にあり

安澄古城記に云細川満俊の子淡路守成春後に隱岐守と改む此成春射藝善く将軍義政公の師範なり仍て将軍家停止せられし犬追物の射と許れ城辺に犬塲を設ひ稽古せり今の野原村の地は犬の馬塲と云ふ所なり犬追物の一町に二町許の埒を構へ行馬を結んで射術を練磨有し旧跡なり

成相寺鳥居 鳥井村にあり石の大鳥居村中にあり是より成相寺へ十八丁に町毎に標石あり當村は福良に通る街道なり鳥居の事異説多く列仙傳に載る華表と同様に心得るは非なり鳥居は雞棲なり雞棲の義なり 爾雅釋宮篇 詩経に故の字なり 古來より上長押と其上との間に小柱なり是を鴨居と云ふ即ち雞の棲とあるなり水鳥の名を用ひ火を防ぐの表と云ふ神社の惣門是より社地と云ふ限を示すものを鳥居と云ふ尤笠木と下との間を鳥居と号するものあるを俗に通じ安きに依ふ一体の名なれども実は全くの名なるべし

古城趾 同村に二ヶ所にあり里塹にあり 傳云一は島田五郎右衛門一は関加賀居住と云 地方にも虚し未詳

安雄曰栗原の島田氏に属せ〜地士の第地あるべ〜

安國寺廃趾 大久保村にあり寺山と称ぶ又同村に門前の池と号ぶあり是則ち安国寺の門前

細川淡路守氏春大道禅師を招く創建せる所也とぞ池の傍ホ平地あり〜

門の蹟あり又山谷の間ホ佛殿祖師堂僧坊ホの蹟のこれり是棲賢山安國寺の

古趾ありと言ふ安國寺ハ暦應二年毎國ヨ建る所と或記ヨ見へ〜

扶来禅林僧宝傳 巻四 無徳至孝禅師傳曰古山源公 左武衛 常言安國利民

莫如佛乗乃令天下各州建安國寺

右古山ハ左兵衛督源直義法名慧源古山と号ぶ足利尊氏公の兄〜

當山安國寺の開基大道禅師ハ釋一以と号ぶ姓ハ平氏雲州島根郡の人なり

七月二十三日ホ生る十指ホ紋あり〜印の如く頭上ニ肉隆く起り〜角の如し父母

異相あると不祥ありて潛ホ野外ヨ棄るホ牛馬ここに是を踐ぶ叔父拾ひ養ひ

子〜寵〜むホ年経〜角の如き肉潰を落つ叔父亡せるに及んで父母の家ホ飯

る七八歳より好んで坐禅を学び世ホ處の意あ〜天資慈悲の心深く同儕等鳥

獣を捕るを観ては急ヨ走よりこれを乞ひ母ホ價を求め〜贖〜放つ十一歳にて

本國枕木山ホ投り〜薙髪を十四歳の時叡山ホ登り藏山を師と〜ホ後建長寺

ホ約翁ホ謁〜又南禅寺ホ規菴ホ参〜尚南山雙峰の二師ヨ侍を其高徳世ホ震ふ

後ホ淡州ホ退去〜〜菴居ハ時ヨ養宜屋形氏春 或師氏 菴を改め〜安國寺と

大道を請〜〜以〜開山と仰然るに大道が初の師藏山順空和尚を重んぜるが故ニ

自ら謙譲〜〜藏山と〜〜開山第一の祖〜〜佛殿法堂同時ホ建立あり〜〜

神祠祖堂亘殿の左右ホ連なる而して後僧堂山門營建せ國人ぞ〜〜禅宗

なりを知〜〜ぞ延文元年正月一條藤公丞相の鈞命ホ應じ東福寺ホ住ハ

應安三年庚戌二月廿六日逝ハ時年七十九歳也尚〜〜扶来禅林僧

宝傳本朝高僧傳及び大道和尚行畧等ホ見へ〜〜〜〜れと畧ハ

今寺山の廃趾の上ヨ〜〜〜大雄佛殿の跡その左ハ祖堂の趾あり立石の正中ヨ圓鏡

の形ホ彫るあり俗ヨ〜〜れと鏡石と〜ふ〜れハ圓鑑禅師 藏山順空和尚 〜〜〜〜開山の祖

〜〜故ホ祖堂の前ホ標示せ〜あるべ〜 大道師と重んじ〜藏山を以て開山とせ〜世ヨ勸請開山と〜〜是あり

龍女實弘上人ゝ
誓ひて磐石を
砕く

又傍ニ白理き奇石あり所謂明鵡あるべし其餘異石多し金剛座明鹿龍鼻岩
等凡そ其形容ども〻辨ずべきなり夫より下の平地に演法堂の趾あるべし其
最下に僧堂の蹟又に山門のあり〻所と云に犁き〻田圃となる所多し舊此
に細川師氏の閑居の菴地あり寺の後の山に龍鼻岩の古墨あり最高峻あり上
に木大久保の間ニ居り

成相溪 馬廻村ニ居り奥谷ヨリ流れ〻成相寺の前を経て門前の池を過て八木川ニ入る成相ヶの前
蛇磨石 蛇磨石より下ニ児淵釜淵などあり

成相寺の前溪岸ニ居り其形龍蛇の屈伸するごとし大盤石あり故ニ此辺を蛇磨川と号ス

傳云往昔當成相寺の閑山實弘上人容觀とかたち時容顔美麗なる婦人来り
〻聽聞を願ふ數あり上人怪〻て何人ぞと問ふ答て曰我は龍女なり此溪
中に住あと久〻願くは上人愍〻て妾が苦患を助けよと上人曰汝が願ふ所
我法力の及ぶ所なり然るに我力の及べざるもの一あり夫に余あり此寺前ニ大
盤石あり溪を塞ぎ〻流れを横る此故に溪水増る時に境内を浸すなり
ば往来の人を労せむ汝〻此石を裂き〻水を通ぜば大幸あらんと婦人の曰其ゆ



難ニ非ず余ニ隨ひ奉らんと諾〻去ぬ斯て其夜に乗じ来り彼盤石の上ニ
身を宛轉〻ころぶ盤石たちまち破裂し水速に行と得ず婦人龍蛇の形を現じ
て上人に謁ず上人其功を賞し且喜び〻懇ニ説法〻獨鉆を以て額に投つけ
ば〻〻頭の角落去て形は消て失ぬ其夜上人の夢ニ蛇身を変ず成佛し
て上界ニ生ると得と故に未て師恩を謝し奉るはと告ると〻

金石橋 同所の川に架し石の類ニ〻金華游録云石鐘手槌之金声ト此類いと〻〻

擁護山成相寺 馬廻村成相谷ニ居り真言宗 宝德三年炎上ス〻び〻と後に再興ス比文明二年の紹隆状ニ見へたり

本尊 藥師瑠璃光佛 聖德太子作 往昔伽藍魏〻〻し時に金堂に安ス本尊と云

釋迦牟尼佛 聖德太子作 不動明王 慈覚大師作 觀喜天金像 古佛古聖天堂
古釈迦堂本尊 古護摩堂本尊 本尊今三躰しも本堂ニ安ス

大日堂 本堂の左上の方ニ居り大日如来と安ス堪慶作 阿字石 本堂の傍小祠の中ニ居り
大塔の本尊と云運慶の作 大師の作と云

鐘楼 本堂の向ニ居り 中門 僧坊の向正面ニ居り 大門 中門より凡一丁余西ニ居り金剛神の両像と
安ス〻〻古作〻

鎮守社 丹生明神と云 摂社 金峯権現 熊野權現 鎮守社の左右に列ス

若宮八幡宮 三社の前左傍 鎮守例祭二月十六日 神輿渡御の式ス

當社御上葺開山以後相當第四度今度當國太守淡路守源朝臣尚春
爲御願三社御宝殿令修造給者也殊者若宮殿者直之為御願御上葺
御沙汰候也　大工天王寺雲州翁藤原光則　以前両度者槙瓦葺今
度者檜皮葺　明應□□□（文見不見）　院主影仙院住持賢秀

寺説云當寺ハ往昔人皇八十七代後嵯峨帝の御宇仁治四年（寛元元年改）高野山の僧實弘法師淡路國ヘ配流の時高野山と撰〻堂塔と成相谷ヘ建立〻擁護山成相寺と号ス金堂大塔大門中門護摩堂釋迦堂大日堂聖天堂祖師影堂等魏々こうしゐ當山伽藍の古圖ヘ見へ〻今も尚礎石此方彼所ヘ遺ル尤境内廣太ゆ〻て西北ハ鳥居村と堺とス（十丁）西南ハ寺内村と堺ス（是又十八丁）堺の石今ヘ存ス南ハ社家村と堺とス其中も堺の石尚残ル然ル中世廃毀せと兼源法師再興ス文明の頃信秀和尚明應の頃賢秀僧都住を寺家ヘ大慈院遍照院明王院長福院善如坊等あしと聞ゆ今悉く廃ス林中ヘ菩提樹多〻實弘上人植る所と〻

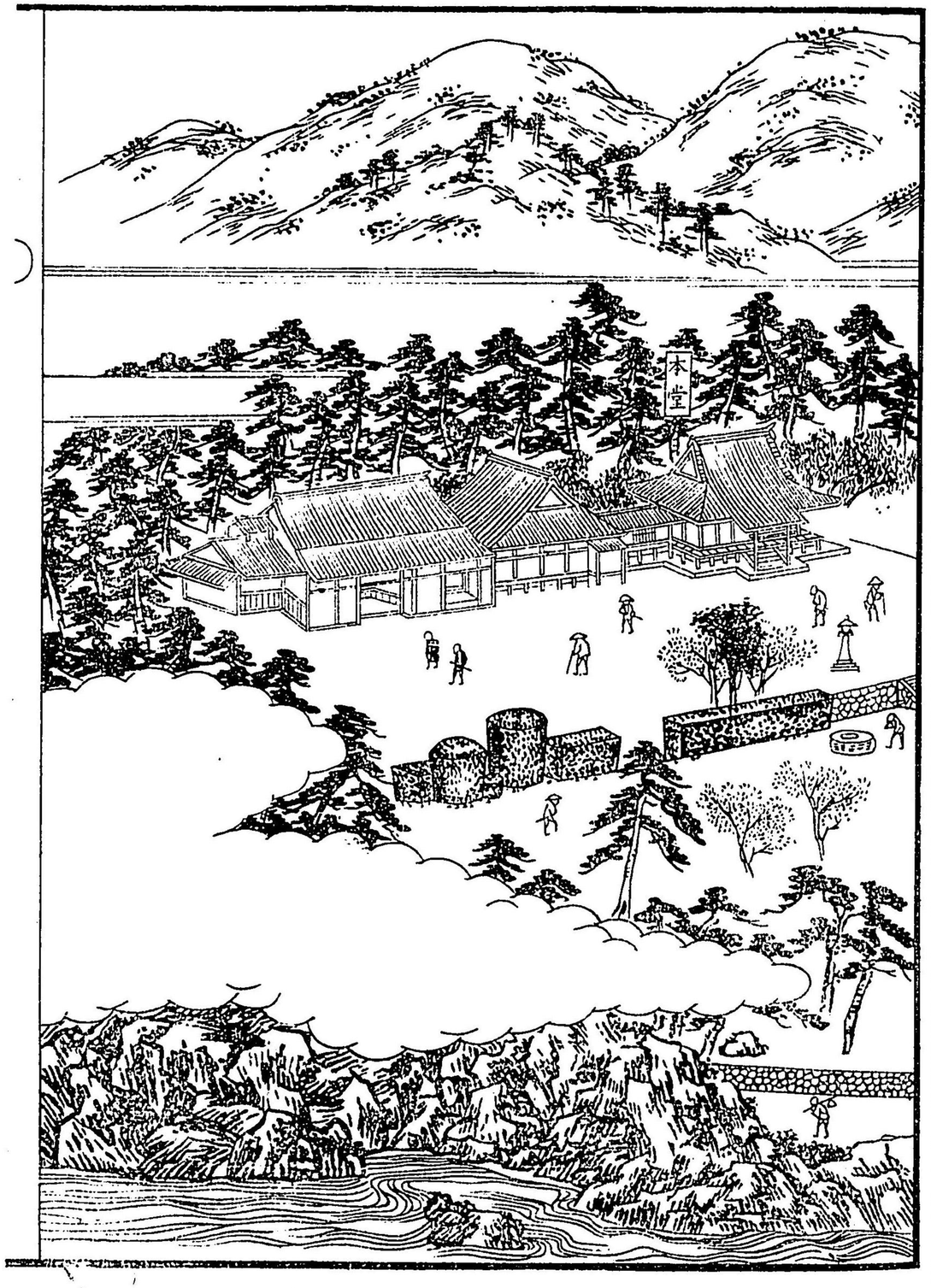


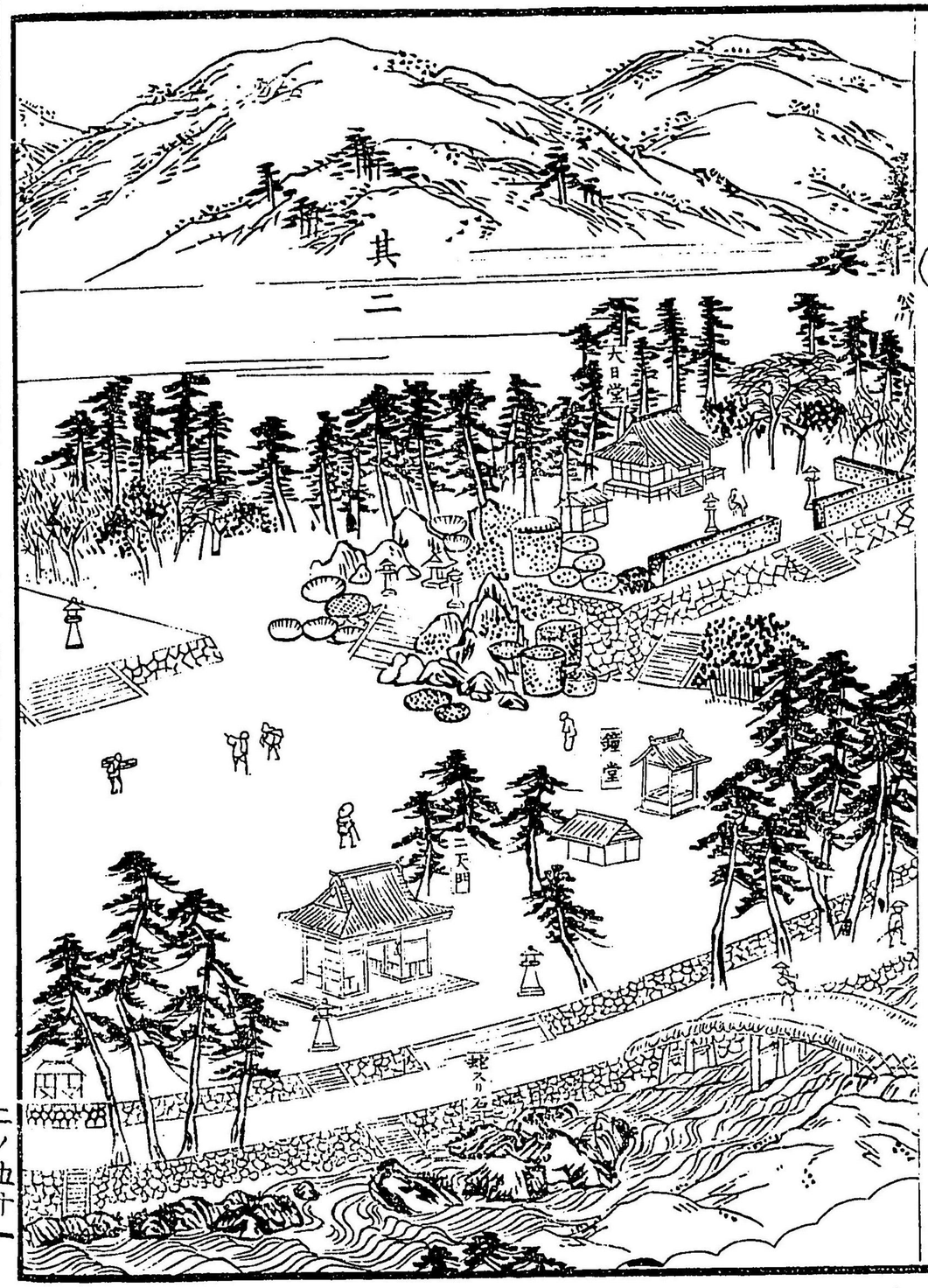
奥院古趾（谷の奥ヘ行く後生谷と称ス高野山の奥院と摸せ〻所と〻）

按ヘ仁治四年（寛元元年と改む）鎌倉の時代（小笠原氏淡路国守護ゆゑ守護所ハ養宜ヘ居〻〻）高野根來両山訴論の支保延の後百年を経〻息ぶ仁治三年の秋又根来ゟ謀訴ゟ此時六波羅ゟ高野の衆徒二十餘人と召〻京ヘ向ヘ其頃根来の一寺火災ゟ〻と高野の所為と定められ明年正月みな國〻へ配流せらるゝ也道範讃岐國へ配流ハ此一條ヘよりてあり其紀行ヘ曰二月二日淡路の岩屋ヘ着四日石屋を立〻炬口ヘ渡る同日船ゟ下り〻陸行三里淡路の養宜の國府ヘ着り中一日を経〻ゟ岩屋の宿まで淡路の配流の人同道たゞひヘ世出世の事あゞ語り〻慰むゟ件の人ハ炬口ヘ留りぬと云ハ則實弘上人のゆへとぞ斯〻実弘ス此成相谷ヘ伽藍を建立せらるゝ〻ゟ國人ゟ〻〻敬依し終ヘ魏々ゟ伽藍とゝあるゟ後ハ実弘ハ飯山寺ヘも住せられ〻ゟ彼地ヘ実弘上人の墓とゝひ傳ゟる所ゟり遷化の年月ハ詳あ〻ゞ

成相寺
大門
三社
明神社
石垣
大門

青龍權現
神興庫
御供所
裕幕
新や
瑠璃光
ふの上
ふ一房
松花


本堂


其二
大日堂
鐘堂
二天門
蛇スリ石

屏風岩 成相寺より十八丁奥にあり懸崖なり屏風を立てるごとし

石盤 蛇磨川の西岸人家の門前にあり世人石の湯釜と称し其形釜のごとし 過半土中に埋もれり

上田八幡宮 社家村にあり社僧覚住寺 馳道の長サ九町左右梅の並木あり

本殿 應神天皇 若宮武内社 本社の左右にあり

竈殿 鐘堂 隨身門 社頭にあり 石鳥居 馬場の末にあり

里人云本殿の神躰許多桶に納め本殿に祭りしとぞ

例祭八月十五日 十一月九六日 八月の神事は神踊在家踊坊主踊等の式あり十一月は神輿馳道の末なる御旅所に渡御あり

上田大日堂 本社の右の山の方にあり本尊大日如来 阿弥作なり上田堂供養なり舞楽の勅筆 大般若経 人王八十六代四條帝の御勅筆にて書写の奥書あり 是は中世大日堂の内より出る所なり

第三十五卷 第百二卷の奥に仁治二年辛丑二月十五日書写第百九卷奥に仁治二年辛丑二月九八日写畢第百七十一卷三百三十六卷等に宝治の年号あり右の余卷には奥書なし剛本にて渾て三百餘卷あり



覺住寺 同所にあり南隆山多聞院と号す本尊如意輪観世音 聖徳太子作と云 二王門は八幡鳥居の傍にあり二王門の古跡は馳道の末にあり

當寺に古き鬼簿及び旧記許多あり味地草に委く出 又松島宰相頼光より五大尊五幅並に護摩の具等寄附の事あり 松島は何人なる未詳

辨財天祠 二王門の傍にあり

上田古城 同村の西にあり上田の土居或は上田殿と号す平地にして門の趾は東にあり今尚大門と地名とよぶ土堤長サ七十間許高サ一間許南北に潰く東西三十間許

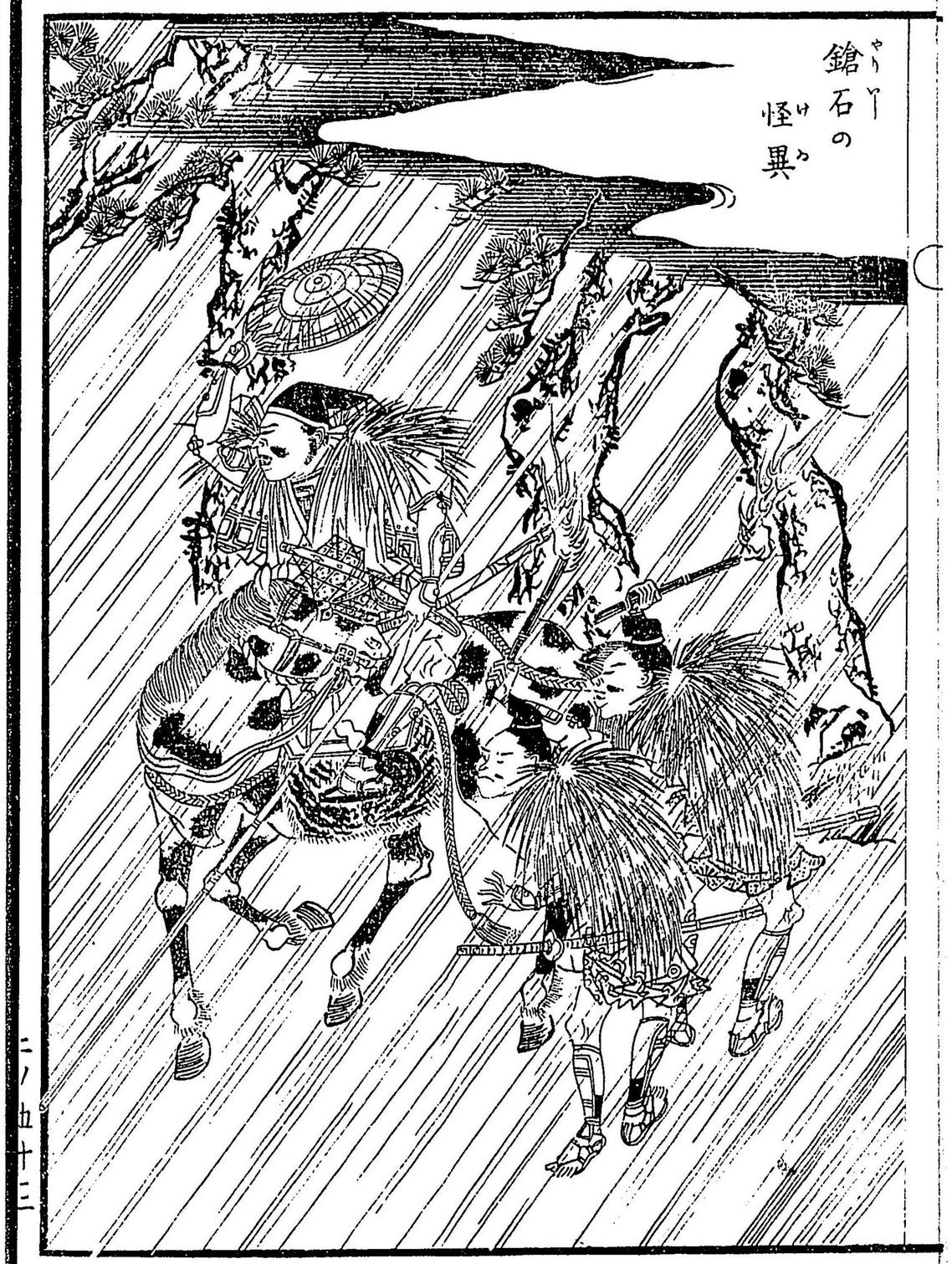
一説に八木の細川別業なりと云又覚住寺の鬼簿に上田院殿天秀等俊俊公居士永正九年壬申七月廿日卒とあり是此上田殿の法号なり公の字なりは養宜細川の通字と察られば同姓の氏族なるべし 常盤草

或云三好長慶の家臣吉田三之丞及び舎弟五人とあり當州に来り上田殿の廃跡に住せり三之丞後に阿別島に於て討死せり云

犬馬場 同東にあり細川氏春以来犬追物場なりしと跡あるべしと云

以久社 同村にあり里人當社を以久明神と称せり上田院以久居士の号と多くは云事実詳なるべし尚考べし

古城蹟 同村南の山の手にあり細川家の別館あるべしと云


鎗石の怪異

鎗石　立石村街道の傍に有り此石直に立つを以て立石村と号するとぞ
此地は洲本より福良に通ずる往還なり
里老の傳云往昔小栗某と云武士雨夜に此地を通るに美婦の燈をかゝげ
て行に出會その形勢いと怪しきゆへ直に鎗を以て突とあるれば婦人
はうぐと直に立る石なりしとぞ然るに其突とあしき鎗の痕石面に
て今に有故に石と鎗石と号け村を立石と云なり彼武士の強勇推て知べし
前漢の李廣　李將軍又は飛將軍と云　武勇人に勝れ射法に善く或時山野に出て獗
る時草の中に大なる虎を見て携る所の弓矢をつがへて矢を射る其矢
はやまくに中つゝ羽もぬけざるまで深く立こゝに是を能見るべき虎にはあらざる
大石なりとぞ彼小栗何某が鎗石の故事も和漢同日の論とも言ふべき乎

國分尼寺古趾　新庄村と称す今俗に尼寺と称す小堂に藥師佛と安置境内に稲荷祠あり例祭
八月十日に撰行
天平十三年詔して造らしめ給へり法華寺と号し後承和六年勅して法華滅罪寺と号けるなり
續日本紀續日本後紀に見えたる今廢して小堂と営み其跡とのこれり本尊は古佛
護國山國分寺　國分村にあり其始法相宗なり所當寺第六世照運法印の代寛文六年に南都招提寺の
末流とあり真言律宗兼学と云金光明院と称す
本尊　釋迦牟尼佛　長丈六　行基僧正作

股檀　弥勒菩薩　惠心僧都作　毘沙門天王　聖德太子作　賓頭盧尊者　十五世照算建立本堂
禄の傍に有り
七重塔址　本堂の向ふ左傍に今小堂と営み大日如來と安置堂の置に古の塔の礎石あり天平十三年
二月十四日を以て天下諸国に詔して曰国別に金光明寺を造らむ其金光明寺に各七重の
塔一區并に金光明經を一部と写して塔の裏に安置せと續日本紀に見えたり則ち是なり今の大日堂は
元録年中に造営まるとぞ
春日社　大日堂の右に有る小祠殿　金毘羅稲荷と号ぶ
鐘樓　同右に有る小祠殿　鐘樓を再建す
羅漢堂　本堂の前右の傍に十六羅漢像を安置天明八申年羅漢像并に堂建立志知川浦の村長
舩越直翁発願主にして一門と勸進して成就せとぞ
堂内に記して曰羅漢尊兄堂成就入佛供養　寛政三年亥年　發願主　舩越直翁景政
其余勸進者の姓名と許多あるとぞ略之
里老曰當国阿那賀浦山口甚四郎五代の先祖子孫多くして分家して或は他家と相續して又は嫁して其親族
百二十有余家に及ぶ直翁も其一類なり故に直翁其一門と勸進して此羅漢と建立せしと
龍馬石　羅漢堂の左に有る馬蹄に似る石紋なり今石面あれども分明ならず馬蹄石とも云
傳云昔建久年間此地に九足の馬出生せり其蹄の石と此石面に似たるの也

東鑑云建久四年癸丑七月九四日戊子横山權守時廣引一足異馬參
營中將軍覽之有其足九前足五後四是出來于所領淡路國國分寺辺之由
去五月之頃依有告乍怪召寄之旨言上仰左近將監家景可被放遣
陸奥國外濵云云
周室三十二蹄者八足之呼入止也本朝一足之九足誠可稱珍歟然而房

星之精不足愛令被却之於千里瀧桃尤可為栄者哉

當寺ハ人皇四十五代聖武天皇天平九年三月詔〻國毎ニ釋迦佛像一軀狹侍菩薩二軀ヲ造ル兼テ大般若経一部ヲ写シ給ヒ同十三年國毎ニ國分寺ヲ建立シ又其一寺ヲ分ケ其後四十六代孝謙天皇天平宝字二年七月勅シテ朝廷安寧天下太平ノタメ金剛般若経三十巻書写シ當寺ニ二十巻尼寺ニ十巻ヲ安置シ又恒ニ金光明最勝王經ニ副テ並ニ轉讀セシメ玉ヒ号シテ金光明寺ト云フ又七層の塔ヲ建此裏ニ金光明経一部ヲ納メ又 續日本紀 續日本後紀 ホニ云フ〻〻

然ルニ暦應三年 天平十三年ヨリ凡六百年の後 上寸務尊忍房盛尊の代ニ釈迦の大像ヲ修理ス其像中の記文ニ曰

淡州國分寺本尊釋迦一躰敬曰暦應三年 歳次庚辰 三月□ 辰 手斧始同四月七日 庚戌 本開眼四年 歳次辛巳 六月廿五日 辛未 御安座祈禱聖人僧 或衆 来□

議圓房 同寺住 大願主僧盛尊 尊忍房 當寺住 女大施主海氏女 大佛師兵部法橋僧命國 觀地房昔者洛陽住今者阿州名西庄第十蓮福寺住 結縁細工番匠僧流泉 或 戒忍房 □光寺住 僧盛弘 良忍房上田八幡住 僧重信 性圓房 當寺住 信心結縁衆僧□□ 道賢房阿州名西庄中島郷延福寺僧

平光久治部允藤原近實□□□□ 僧禪尊

若盤□□□ 右記文磨滅〻〻見ざる所圖を加ふ

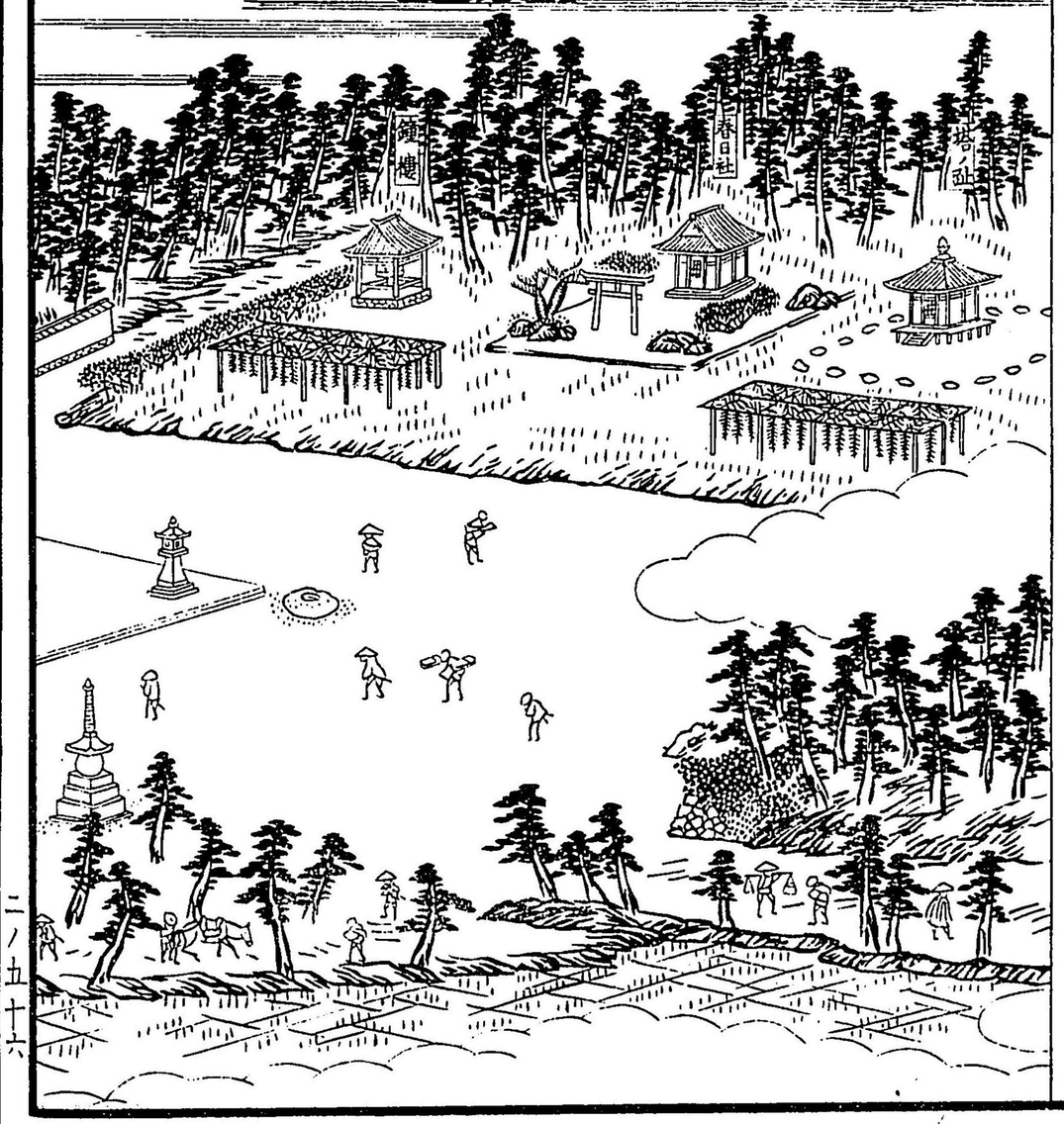
按ニ此時古像ヲ擬〻新像を造刻セシ或ハ古像の破壞〻ヲ修補セシ〻〻然ルニ其後百八十有餘年を経テ大永年間諸堂再回破壞ス時ニ回國の沙門俊泉ヲ〻〻末ツ〻〻伽藍の頽敗を歎き終ニ止住〻〻大永五年乙酉八月本堂及び諸堂を再興ス勸進疏一巻今尚寺ニ藏ス其略ニ曰

聖武皇帝於六十六箇國建立國分寺本尊一丈六尺座像釋迦行基菩薩之作也本堂五間四面之伽藍莊嚴魏〻世及ニ浣季寺社供料墜落佛閣朽損爰六十六部之聖某至ニ于此歎伽藍之敗壞有志興復於是勸進云云 大永五年沙門俊泉敬白

故ニ此俊泉と云ふ〻中興一世と称ス此時大土居上田の両城より各厚く佛

## 國分寺

往古ハ例年正月四日より十四日まで金光明最勝王經を轉讀し安居の會ハ最勝王經を講説せしめたまふ淡路國國分寺ハ稲五千束を給ふ延喜式ハ見えたり




## 龍馬石

立凡四尺七寸
横巾 三尺
高サ土を出る
こと九寸余

供料を寄附あり〻と也これを依て今ゝ両城戦士の霊魂の戒名過去帖ゝ有り例年十月五日法事廻向ありと云

（傳云此僧俊泉何処の人たる事を云ふべし大永中諸堂を再興し後松帆の浦に終る）

永定ゝ入

又其後天正年間凡六十年の後あり兵火ゝよりて諸堂悉く焼失し漸く丈六の釈迦古仏像四五躰佛舎利等存せるのみ今有るのみ正保年中第五世快尊法印の時ゝ成りてハ僅ニ一院ありて本尊を草堂ゝ安せるのみ時ゝ第六世照運法印の代寛文五巳年寺を建立し貞享元子年本堂を建立し古像を安置ス今後追々再営ありて今時の如く成りたるぞ則ち當時の本堂ハ金堂の古跡寺ハ講堂の旧地大日堂ハ宝塔の址といふ尤往古ハ境内廣大ハして寺院許多充満せり凡西蓮坊宝幢坊弥勒坊藏泉坊本学院（神宮寺）正寿院（十輪寺）成就院（法蓮寺）等廃毀〻其名のみ此彼ゝ礎石を存ス就中法界寺ハ寺家の第一なり〻ゝ延宝中ゝ廃し田圃となり〻ゝ字ゝよび本尊薬師佛ハ今小堂を営み〻村中ゝ祭り

金剛寺　右同村ゝ有り直言宗　本尊薬師如来を安ス行基作とゝ伝ふ什物ゝ古圓鏡一枚あり

（傳云ハ〻当寺と榎並の威光寺と三原郡中の両門主ゝ門下多く有り〻〻）



善光寺　善光寺ゝ有り清恭山と号ス村の西ゝ有り信州善光寺本尊と同佛ト云

本尊　阿弥陀如来（閻浮檀金の立像長一尺八寸一説ゝ閻浮檀金ハ宣徳の代黄唐銅を〻と言へり）

脇士　観音勢至

十王堂　本堂の東ゝ有り冥官十像と安ス堂前ゝ高サ三尺二寸許の古碑あり永禄十年三月十日と勒ス永禄ハ京都足利将軍義昭の治世〻

当寺ハ往昔野口氏香華の寺〻て世〻の古墳あり又寛永三年本尊の眼鼻より舎利出る群請駿〻き支あり云

八幡祠　右同寺の南ニ隣る

野口屋敷跡　右同村の中央ニ野口と字する地あり里俗野口中〻と称ス方廿間周廻堀溝の形と存ス当村の旧名を野口村といハ野口氏世々此地ニ居住せる故なるべし

往昔此地ゝ管家の末裔野口氏數世居ス後天文中城を松本村ゝ築き移る

大永年中朽木宮内信直あり〻住ス天文十七年卒　其子真野重内信武の時

阿別撫艱ニ移る

常盤草ゝ矢と鞆と通ひ〻矢口ものぐるゆて往古矢口足尼の居住せ〻所ト云云

舊事紀及國造本紀曰淡路國造難波高津朝御世神皇産霊尊九世孫

矢口足尼定國造ト云云

建久四年の頃淡路國國分寺の辺ふ其脚九尺ばかる馬出來は領主横山時廣これを引て鎌倉ふ参じ頼朝將軍の献覽ふとゝ東鑑に見えり

## 觀音堂

小井村の中央に有り十一面の安置立像長三尺許行基作と云當寺は霊験勝れてたゝりあり人祈願のしるしを多く利益を得るもの〻より許多あり云

### 當寺縁起に云昔服坂侯の臣福原半左衛門當所を給地に時に観音堂の前に松の大木長十六間なる物あり世〻其木を丑物と觸る者もあり〻を半左エ門無道にして是を伐らせ板にひらせ我屋敷の造料に用ゐ然るに同年夏の比半左エ門が一女九歳なりしが急に腹痛狂熱し〻口にて言やう我境内の秘木を故も〻伐取る憎しみに汝が愛娘とり殺すべしと罵り怒り終に死しぬ半左エ門大に怒り歎き馬上にて小井村の観音堂に打とゞ鹿つゝぶ猶々憤り〻蓮堂の邊に大便をしけ穢しつく飯にて傍若無人の挙動いとん方なし村の人〻住蓮寺（立石村に有）法蓮寺（国分村に有）の僧を招ぎ穢を洗ひ清め罪を報ぜむ時は十日を歴ずして半左衛門は主君の勘氣を受け家を追放せられ老母妻女を具し志筑浦の辺に俳徊し其日を過られ〻是則観音の罰忽に現に報ありし其後慶長十八年大坂城へ諸國の浪人を招き集められる時半左エ門も往き竜城に再び音信あり討死やしぬ其



行末を知るものなし母妻女は乞食となりて志筑の辺をさまよひ居るが弥飢饉に及び女房は母を泣〻突き殺し其身も人哀なるさまにて居るが近頃路頭に倒れ死し〻有しと聞る偏に薩埵の罰なり其身なりうと母女房までも斯る悪業を肆なしるべし人皆知る所〻云云

## 圓行寺廃址

圓行寺村に有り青木山円行寺と云佛を安置むち家許多有しども今廃し〻小堂に弥陀

### 鰐口一口

延文二年の銘有り南朝正平十二年に當る足利尊氏の治世にて當国養宜の屋形細川氏春の時代の古物〻

## 唐門（堂森）

青木村福良街道松原の傍に小高き所に櫻樹有りて其下に建る高サ六尺五寸横三尺一寸厚一尺

### 賀集盛政碑

石面に勒して曰淡州三原郡賀集左助藤原朝臣盛政　天正九年辛巳八月吉

一説に賀集氏は原三善なりとも阿波勝瑞の城主三好實休に属せるより其領地の郷名を取て賀集氏に更むとも

## 白髭神社

喜來村に有り富田喜來黒道地頭方青木浦壁等六村の生土神とし例祭正月九日両度とも九日を用ゐ

淡路國名所圖會二之巻終

編者　浪華　曉鐘成

畫師　仝　松川半山

筆耕者　浦川公佐

雕刻者　鎌田酔翁

青山富三郎

明治廿六年十月廿日印刷
仝　年十月廿日出版

著作者　故人　木村彌四郎

右相續者　大坂市西區土佐堀通五丁目三十三番屋敷　木村友松

發行兼印刷者　兵庫縣淡路國津名郡洲本町外通二百七番地　福浦文藏

10
5
19

# 淡路國名所圖繪

10
5
19